

今度被尋仰度儀有之大樹上洛被仰出留守中自然横濱鎖港談判相弛候ては不被

思召候間可然者へ致委任鎖港之成功候様被仰出候事 十月三〇年文久三年

二一 江城下夷物商人をいましむる張紙之事

我等共願天下之形勢爲神州欲救萬民窮脱アルカ故追々交易募歎息不忍見候已來唐物賣買之者於有之者悉正之其奸賊急度可爲打首者也但今夜より五日之内差免し右五日過候て用ひさるに於ては銘々可致覺悟もの也

文久三年十一月二日

報國雄士

唐物店主人共へ示置者也三日之間急度張置もの也

二二 長州留守居届書之事

國元を根來上總と申家老之者大膳大夫歎願之趣に付大坂迄罷登候近々京都著可致候間追々御沙汰之趣も有之候付御届申上候以上

九月十三日 (文久三年)

乃美織江

二三 長門藩形勢之事

さて上下一致必死之覺悟と相見へ御他國之七卿之御内三條様方は萩へ御入被遊半分は防州三田尻へ御入被遊毎日調練或は炮臺之營有之専合戰之用意而已寺院々々は誦名經讀終候へは直様墨の衣はねぬき劔槍之



藝終日相勵間には婦人杯佩刀にて徘徊いたし武門之面々は老若之分ちなく終日劔槍弓炮之藝或は楯を矯かせ矢尻を研宰相様之冤罪を憤らぬ者は無之由長防三十五萬石といへとも現實八十萬石三方海險を受一方は山阿之固帶甲數萬人器械精練す加之上下死生を俱にする之形勢なれば當此時若烈敷御咎もあらは恐くは天下之傾覆も不可測云々

十二月 (文久三年)

二四 長門藩外夷船討攘之事附薩摩之船燒滅之事

云々然は舊臘廿四日の七時長門國豊浦郡府中沖合異國船壹艘上筋より乗來候に付赤間關炮臺にて相圖兩度迄打揚候處右船無沙汰にて夜に入五時比押て炮臺前面へ乗來候に付急襲と心得及炮擊候然處右船上筋へ乗去候段彼地出張之者より遂注進候右之段服部長門守様へ以書狀被申

述候段爲御知如此御座候以上 正月○元治元年

右長州之長崎御留守居より爰許御留守居へ廻狀を以知せ來處之文面一筆啓上仕候餘寒強御座候處各様御安泰被遊御座珍重之御儀奉存上候然は田ノ浦にて薩州船一條廿五日出幸便を以申上置候夫々御承引被仰付候儀と奉存候

一此度兵庫より罷下候薩州蒸氣船燒失いたし候乗組之人数上陸之者并不相見候人数共左に申上候尙又上陸士官之者より國元へ出狀相届候文面寫左に申上候

上陸士官より薩州へ届狀内々寫取

士官 大原林左衛門 船手水夫頭目見上 上床 仲之丞

船手水夫頭 和田覺右衛門 松元正助

川江熊助 第一等機圓方 益滿治兵衛

中村彦助



機圓方 溝江友次郎

福富祐右衛門

上木龜次郎

船手

池田仙助

遠大善本ノ、けさ

山添伊八

山元彌太郎

仁禮庄太郎

中島半左衛門

火焚

鬼塚法次郎

森永藏五郎

荻田十兵衛

森永才次郎

井口庄けさ

田中仁次郎

高口源次郎

林 森之助

宮内利助

松本次郎左衛門

賄方

熊次郎

賄方

甚四郎

龜次郎

けさ助

平之助

正太郎

助次郎

利右衛門  
政右衛門  
外に便船人 濱崎太平次

小太郎  
合計三拾六人  
原田本右衛門  
外に二人

右は上陸之人數惣合四拾人十二月廿六日小倉城下へ引越逗留罷在申候  
身廻着具等大小迄に相求候儀に御座候

宇着彦右衛門 兒玉蕩之助 久保六郎  
大田小平次 向井伴右衛門 岩元市之助  
坂元城左衛門 榎 十郎 鮫邊鐵哉  
右士官

梅田市藏 二方震左衛門 古田嘉助  
秋岡金右衛門 上原市左衛門 前田善助  
池田庄八 濱田伊兵衛 西四郎右衛門



酒匂藤次郎 ○内田源次

為次郎

俊次郎 半十

佐太郎

善四郎 平次郎

助熊

龜吉 合計貳拾八人

右上陸無人數

○印は死骸上り居候分

長崎製鐵所より御借入蒸氣船乗組六拾八人但便乘人共  
右御船之儀古船にて機械并船之内相痛候に付御修復として此節兵庫よ  
り長崎表へ被差下候に付去廿二日朝四時兵庫津出船仕昨廿四日夜五半  
時豊前小倉領田ノ浦乗入碇泊申候處長州臺場より致放發臺場より田ノ  
浦之儀は餘程隔有之候得共懸念御座候に付直に碇を卷揚小倉領之内白  
野江村青濱浦へ乗歸碇泊仕候然處無間も船底より煙出候に付相改候處  
釜候風呂臺より矢倉板へ火相付早底積綿へ燃付居候に付船中一統相掛  
り消方可仕候得共其詮無之御船及燒失形行左に申上候

一火之元之儀は釜屋表之方に有之兵庫出船より晝夜禁通し候て風呂臺へ  
火相付底積綿へ燃付煙出候節氣付則消方手を盡し申候得共異船形は惣  
矢倉張にて船底より引出方相調丈け無御座數本之綿へ燃付燒失仕候何  
そ不審之廉無御座候

一火燃上り候に付蒸氣焚立陸地へ乗揚度陸地へ乗越候得共最早船内惣體  
火燃付移り指揮自由不仕都て沖中へ流出申候に付乗捨銘々海中へ飛込  
游き揚り爲申仕合にて一身之働さへ相調兼候儀に御座候處上陸不仕人  
數何様共不相分其夜は勿論今日迄も所役人へも引合尋方仕候得共行衛  
相知不申昨日より之天氣惡天にて西風烈敷白野江村青濱之儀は西風吹  
出し候場所にて沖は周防灘海にて御座候得共折角尋方仕居申候  
一御船之儀は廿六日朝迄燃居候處朝六半時分には沈船仕候得共風強探索  
仕候儀相調不申木船之儀にて船形都る燒候方に相見候得共評目次第に  
て探索仕何分追々可申上候



右之通御座候に付形行早々急飛脚を以御届申上候委細之儀は追可申上候 十二月廿六日 (文久三年)

一積荷物之儀は 一からし油 一光明丹 一唐土 一綿 但綿届書は廿五本と有之候得共内實は六百本積入居候事 外に材木釘類等 バツテイラ貳艘 碇貳頭

一薩州上陸之人數は別段之通自火と申唱居候得共小倉邊風説は廿四日夜六半時比上筋より乗下來田ノ浦驛瀬戸口迄乗込候處長州前田之臺場より數拾發打出し進退相極跡へ引返候間も無之俄に御印付之挑灯等數拾張出し候得共炮發相止不申其内蒸氣船燃上り田ノ浦沖より追々燒燼相流申候自火に無之風聞に御座候尤廿四日夜半にて無間も沈込候儀に御座候如何之次第に候哉上陸之者意味合にて自火と相唱候には深き思慮有之候風聞も御座候

昨廿四日夕酉中刻比薩州御手船蒸氣船壹艘上方筋より罷下長州沖乗掛

語に云惡  
昭すもの  
な得ずこ  
人得ずこ  
を誅す惡  
冥々の中  
得ずもの  
誅すつれ  
しとるつ  
けんまざ  
げんまざ  
やべ

り候處長州路より合圖打有之然處右筒音應し候哉豊前田ノ浦より廿丁計上之方にて乗留碇を御候趣之處長州檀ノ浦杉谷所々臺場より放發いたし右筒音當表へ相響き候位其時刻は五時比に御座候碇を御候船には長州路放發右蒸氣船に打込候趣にて蒸氣船自火に相成昨夜半沈沒いたし乗組之人數士官并以下共七拾人計之趣内三拾人餘田ノ浦より一里程上之方青濱と申所に上陸いたし候相殘人數は燒死候哉亦是溺死いたし候哉未不相分右上陸の人數三十人計も當役所へ届出候に付當表へも著類其外御手當に相成御差廻に相成申候尤右上陸人數は明日當表へ御引越に可相成當地にて養生等可被致趣に御座候薩州士官之内大原と申人存命之由餘は士官不殘不相見候趣上陸三拾人計之者はいつれも水夫之趣に御座候誠御混雜之儀に御座候追々荷相運候哉尙又明日承り可申上候

右御注進申上度不取敢幸便十二時限差廻荒々奉申上候委細跡便可申上



候以上

亥十二月廿五日夜戌中刻出

## 二五 賊虜等誓約之事

亞魯英佛四洲盟約書和解

我各國往年 日本國を屬國たらしめむ事を謀ると雖彼國我紀元の始より諸洲に獨立して他を交へす加之勇性一世界中其右に出る國なしとの淵底恐怖之心なきにあらず此頃年墨國其魁となり書を以て和親を求め驕威を以て互市を謀るに驚易して許諾す是を以て察すれば柔弱清國に劣れる事遙なり實に累年遅期せし事を悔智辨不足又嬰兒を欺くに類す因て遠謀成就近きに在へし故に推歩を以て限るへし八港の外漂流滯船を許へし然る時は 日本費用を借らすして以て誓約せば滯泊數日に

及ぶと雖愚昧之國吏委諾其妨なかるへし是我大幸とする所也商館に在滯せは近□の商家に利外之利潤を得せしめ耕民には往々我租税の薄きを説き愚民には我教法を説き諭すへし之に加ふるに風波に託して漂流と稱して數艘を八港に集湊して臨機應變兵庫より發起して京師に入らは王都を握らん事掌を指か如し同時に神奈川より蜂起して江府を襲は東西に感走して和兵手を束ぬるに至らん時に浦賀の兵は東西の遊軍なるし新潟の商館は北越の運送を妨くへし宮立も亦因之奥羽兩國の糧を動す事勿らしむへし是の如くは必勝事日を以て數ふへし熟此起元を復考するに墨の智と云へし始め書を以て和し次に在市を乞に信義を以て謀り是を許諾する時は募るに弱を以てす功勞を最第一とすへし書翰贈答の遅速を以て強弱を知る事神妙也返翰の拙文を以て言行の差ひ下愚なるを察するに足れり速に事成上は入貢米穀を第一とせむ下田より以東は亞國領すへし以西は兵庫を限り魯國領すへし兵庫以西は佛英



兩國の領たるへし前條違亂あるへからず盟約狀如件

倉田より借寫

右長崎之醫生原田順菴ひそかに所贈と云此事は文久三年癸亥冬の十二月  
通辭某竊に索隠して胸底に秘するに不忍遂に解譯せし由所出確證の書  
翰をそへたりしを右原田生或藩の政府に差出せしを吏人等一覽冷笑し  
て曰好事之輩妄說杜撰の書を以て世人をして強て攘夷之念を動かさし  
めんと欲す豈足信哉と嗟呼偷安之俗吏時勢之切迫を度外に措こと甚し  
假令今此書なしと雖敵國外患之急なる其情實此書の外に不出を可知の  
み

## 二六 關門出入に付幕府號令變更之事

此程相達候江戸出口宿々御番所へ差出候印鑑之儀萬石以上之面々は家

來印鑑差出可申候尤御關所へ兼る印鑑指出置候分は右同印相用可申候  
且諸關所々々之儀此度改る印鑑相廻し候筈に付兼る相達置候員數之外  
領分知行所等へ往復有之候關所之分は來十一日迄御目付へ可被差出候

亥十二月

一 今度御上洛被仰出候に付は御留守中御取締向一際嚴重に可致候就  
は來る十五日諸國御關所并江戸出候宿々番所等に於て出入相改主人并  
領主地頭之書付持參不致者は不通筈に候間萬石以上之面々は勿論以下  
にても陣屋有之時々家來往來爲致候面々は兼る印鑑道筋御關所等へ相  
廻し置家來往來之度々月日人數等委細に調印之書付可相渡候若脇道相  
越又は押る相通候は、召捕手向致候は、切捨致し候筈に候  
一 御代官手附手代等も御代官印鑑御關所へ廻し置前文同様改可受候  
一 御代官領主地頭附屬に無之土地之寺社家來等其寺社印鑑兼て御關所へ  
廻し置同様改可受候



醜夷爲武藏  
野留守却于  
諸藩參勤を  
忌む冠履倒  
置にあらず  
して何ぞ

一御供にて上京致候萬石以上家來出府いたし候儀も有之候は、前箇條に  
准し可取計萬石以下之分は多人數之儀銘々印鑑差出候ては双方混雜可  
致候間御供御目付へ申立書付申受右を御關所へ差出可相通候  
一御留守中は都て不差急儀に出府致候儀可爲無用候  
一江戸出口宿々御番所等へ差出候印鑑三拾枚程來る七日迄に御目付へ可  
被差出候

右之通向々へ不洩様可被相觸候 亥十二月

外夷和親以  
降民衣食に  
乏流難く殆  
者不終る處  
手足を措ら  
なきに却て  
傲慢無禮の  
賊處を以て  
狙撃を可嘆  
哉

今度御上洛被仰出候に付は御留守中御取締向一際嚴重に可致候就  
は東海道中山筋并關内取締別て行届候様と之御沙汰に候間居城并陣屋  
有之家來差出置候面々は非常之節人數繰出し方等彌手厚に用意致置且  
領分知行所内無用之者入込候は、召捕手向致し手に餘り候は、切捨候  
とも鐵炮にて殺候とも可致尤召捕候者共不取逃候様手當いたし其所奉  
行又は江戸表へ可差出候尤程遠之分等は御代官に掛合之上可引渡他之

引合無之候は、萬石以上之面々は手限り之仕置をも可被申附候勿論兼  
て最寄御料私領申合置相互に不取逃候様可致候但關内之儀は關東筋取  
締出役も打合可被取計候

右之通東海道中山道筋并關八州に領分知行有之面々へ可相觸候

亥十二月 (文久三年)

右之通相心得候様との儀江府より申來候條其旨可被相心得候以上

二七 探索家聞取書之事

一七郎 道家角左衛門江戸へ被差立候時分薩州會津邊よりも其一兩日前  
被差立此方は甚以後れ候處於江戸一橋公惣裁松平大和守等御目見仕候  
處此方之御使者にて甚御安心之旨被仰出候由其子細は薩州は甚不油斷  
會藩は大に衰弱し御上洛を催し自分は早々下度との内存之由何れも大



に信用は難成定て此方之御使者可成と諸閣老にも御待之處にて大に御悦之由仍て當十二月十五日比御發帆之由夫もまた早き筈之處蒸氣船大に損し且俄に御買上等にて隙取候由また焼灰之中より之御立にて別て京地諸大名も喜之由に御座候左候て横濱は彌以鎖港之御廟議決定之由仍て西洋へ御使者被仰付候事人民も承候得共忘れ津田半三郎様杯御出に御座候道家嘶には大和守様一番御人材と奉伺候由誠丸様之御跡にて久留米侯之弟之由

一右同江戸にて水戸土州杯より申込京地之諸大名悉く開港之説のみ御座候間御上洛は決而不宜と申觸し候間其動搖にて暫京地も諸藩色めき候へとも大概間違等之筋相分り申候間静り候由左候て御上洛相濟諸格式相定り日本之基本相立候上長州并七卿之御處置も可相成何も公武御一和無相違御政事御委任に候得は御上洛に不相成内暫押付有之候方と相見候由

一山田五十一月廿九日薩州より御使者被差出候召出願候て探索に關係之面々も一同召出吳候様申開候間道家罷出候處於横濱英國と致談判候處是非生麥にて被殺候者之安家銀は差遣候様申開候間暫日延を申談候得共不承引候間先假に安家銀を遣置候由不然時は直に戦争可及候に付無據遣置候由左候て彌以打拂と申迄之處は假に遣置候事にて薩藩決て開港之説には無之候段吳々申上其懸り之面々へも不洩様申通吳候様申上候間御念入候事との御返答被爲在候由○薩は國許にて此度戰候者共へ申付臺場を築候由左候へは其時之様子を存候故研究行届候との事之由臺場も互に應援之勢なくしては不宜との由

按に三郎公は實に可恐人材千變萬化定りたる腹中見え兼候處置のみにて有之候自分利にさへなれば惣て公武之差別なく何れにも就て之處置と相見薩人も我國は格もなく式もなくと申候由近來は大に海軍を興さすしては不相成との説にて蒸氣船を日本中に多く作るの説を唱られ



開港は可宜  
云々と筆  
者の本意  
笑可憎

候是にて別て開港之嫌疑を被受候由開港は随分可宜説なれとも此上は隣座しては屹と相待之備なくは大成失策あらむ可畏我藩之探索より肥後藩於て心得になる事あらは心付吳候様申聞候處尊藩は何事も機會後れ候と答候由實に病根に疋する也

一右同十一月廿九日藝州迄探索に被遣候小篠宮川列歸候處長州納得不申岩國之手續を以段々聞取は出來候由未だ聞繕に不暇長州侯より吉川二男を養子に御貫之由是は暴論家之計策にて人質にして吉川を誘候積之由夫を斷候間銃炮杯にて劫し貫候勢之由然處岩國にては少しも不驚決て弓矢には不相成して安心罷在様子有之候由

一右同長州へ御下り之七卿之内澤主水正但馬一揆之惣大將として出られ候由其後一揆散亂し主水正之行衛一切不相分候由探索家之考にては定て阿州へ被參候にて可有之由阿州備前水藩杯矢張暴論家多有之候由又中山侍従は萩之城に被居候由大和より逃來十月末長州へ下三條公初其餘山口に移られ

吉川諫の事  
は浪士を招  
集の事か可  
疑

一方今海内第  
一防の強を以  
て浪士を制  
する事能は  
ずんば又執  
しめんとす  
るや

三田尻に二卿留り被居候由浮浪等長州世子之突然たる人物を見込是に必至と付込居日々練練等烈敷事にて君公には吉川諫争いたし候處大悔悟に相成落涙に相成候由なれとも何分力之浮浪を制するに不足を被歎候由

一右同英佛長州へ取懸候一件は薩之中原何某とか申者彼等か船に乗組居候て聞取候て注進之由全く二艘は長州に碇泊いたし居四艘あれば丈夫に三時には臺場は被乗取可申候得共爲念八艘相揃候上取懸候由

一右同薩之留守居にて探索を兼候高崎佐太郎高崎猪太郎と申て從弟同士の由大に才力有之候者にて當夏英國と戦争之時分使番にて四方に命を傳候者之由馳驅之内炮玉之身邊を過候時馬度毎に倒れ鞭を加候ても進み得不申由中々炮玉之大きさには困り候由臺場を打候時分一固は八丁目印之内に進入し空矢なく餘勢目立候武器庫杯惣て焼失之由薩も外夷之戦には大分懲り候模様之由當時薩に長さ二間一尺之大炮八挺鑄立候内

一外欄



一挺はとく出来候由

(欄外記事) 一

炮玉の大き六周り或は外夷の戦には懲云々の語は皆俗人を恐赫するの辭のみ辨士に□の美を談せしむる事なかれと云も豈これをいふか筆者の臆病亦可見

一右同薩之錦小路之屋敷は京之中央に有之候故探索家日々是に一兩人宛諸藩より出會咄合有之筈に候へとも未薩より支有無返答不致由

一右同江戸之三ツ井之店を先月廿二三日之比白晝に焼討し交易にて大利を得候付焼候由張札し火を防候者は斬候旨相觸候由畢て類焼に逢候者へ爲造作料十一萬兩配當いたし候様浮浪ともより申付候由如此亂妨に一人の盜を捕へ賊を殺す話を不聞武威之衰可知

(欄外記事) 二

國家の大警たる夷賊を征する事を不知況哉盜賊に於てをや浮浪士の

二外欄

此舉日暮れ途遠しやむ事を得されはなるへし

一右同御上洛は當月十八日より廿二日迄之御懸日之由尤 朝廷へ之奏

聞は歳末に御入洛と申上に相成候由海路は三日位之事にて候得共大樹公ならば夜は御碇泊にも可相成候間一兩日も夫に迫候位之由

一右同水藩之原勇之進市之進敷とか申者當時珍敷好人物之由諸藩より暴行候由に候處年齢廿七八才位極々乙名敷人にて水府之人には珍ら敷由惣て諸藩探索は極々年若き人之由長州又は藝州杯は其内外之人にて會藩杯と出會候時は頗頑童之戯に恐候位之由會津龍陽之風は甚盛に有之由也藝州は隣り火事に驚候哉大興起し吉川家へ交通し何時も事あらは岩國を救援なすへき約定之由所謂患難に生ずる也我藩之薩に於ける意如何

一宗村長州暴論家にて物頭役佐久間佐平家老穴戸何某美濃なるべし先日十一日中央一潜に京に登り居候を筑前留守居北岡勇平と申者より論し大坂へ下し候由其時北岡より段々長州にて悔悟し是迄數々之過失を御詫に成不申ては筑前よ

三外欄



り如何様とも御取扱出来兼申候旨申詰候處其議至極尤之事に候得共御  
 存知之通君公御父子は御良人之事に候へは御手元より兎哉角と申儀出  
 來兼候のみならず今譬は村<sup>益田カ</sup>上彈正腹切を諸浪人初討取七卿を奉返候處  
 に及候は、先忽自國兵亂に無相違事にて何分長州にて手附兼候間 朝  
 廷より前文之通取計致候様被 仰出候は、其取計も出来可申との致返  
 答候間北岡重て一應は聞えたる様に候へとも長門宰相先非過を悔詫る  
 と申事一言も申出されず如何て 朝廷より右之御處置も可有之哉何様  
 其方より一應悔悟申出仕候は、筑前よりは可添辭筈と申聞候間大に感  
 悟し此度は大に吞込候形色にて歸國いたし候由

(網外記事) 三

櫻田老賊當路の時世上節義の徒を指て水戸浪人或は浪人説と云今又  
 長州人をさして暴論家と云ふ只時俗に阿るの俗言にして利口の邦家  
 を覆すのいましめ可恐可惡

皇氏曰嗟  
 乎輕舉妄動  
 所謂血氣危  
 哉近し  
 道氏は松  
 戊十二日  
 井氏が權  
 を排斥し  
 排也此時  
 の者も聞  
 時不歌を  
 君不見喬  
 鬱蒼小坂  
 熟興松井  
 々々水

一 山田五小篠列中國より京へ歸候途中にて肥後之早打と申て通り候間篤  
 次郎と見申候處中はへにて肩にふとん杯當たる侍二人之由其内一人見知り  
 たる人有之小坂にては無之哉と申候處致返答候間暫く談話仕候て出奔  
 之事杯大に議論し一刻も歸國いたし候様申論候處小坂大に落涙いたし  
 候由一人は高木元右衛門にて遅刻致候迎小坂を引立候處別に臨んで小  
 坂申候は勿論不遠歸國は可致候へとも少しは可遅延由申聞候て長州之  
 方へ參候由京地にて大筒手之内より逢たる人有之候由其儀政府に知れ  
 一人他行は不致様御達有之候右之評判本願寺へ聞候處道家榮三郎片山  
 方弟兩三人にて討取候打立にて書置致し殘置出懸られ候砌實説に無之  
 由聞れ相留られ候由然處右之通小篠列途中にて逢候へは一旦京へ潛み  
 居探り強く候間長州へ通行候方にて道家等打立之節は最早立し跡之事  
 歟と被考

一 右同京中諸所追剝人殺日々不絶三條邊蹴上當り夜五時頃より強盜出る



此編中三落所  
の三見字小坂  
に可相候其  
中餘長門侯  
其は三郎門  
の泪は何郎  
事編者不何  
し甚し者解  
色那がし或  
の諺に所か謂  
涙は曰

事毎夜也御受場内故深更迄廻り方有之候へ共一向手に入不申候昨今は  
非人共罷出候ては見締致候由十一月廿四日五日比甚敷十二月に入候て  
は頓斗三條邊には不出併諸所端々毎夜程人を斬候大抵物取と相見候  
一 淺井新九郎話 同人へ薩藩森岡清左衛門と申仁咄候趣 和宮様より 御所へ御  
文参り候由其御文に薩之三郎殿へ少御疑御座候間御上洛を無理に不被  
仰出候様被 仰上候由右之段三郎殿傳承に相成未た誠實貫き兼候故と  
嘆息之落涙に相成候段森岡咄候由是迄の事は詐術策略も打混如何にも  
難辨又辨し候へは却てあしく今日よりは實説に運ひ誠實を顯し度善な  
らはとこゝ迄も同意之模様聞え候段淺井新九郎候儀を承候事

二八 幕吏外夷更に條約書之事

女王殿下之事務宰相イシントジョンニール足下

左之事件謹て足下へ告知す

一條約へ書載せし二箇所之開港延引之儀に付貴國政府と談判之ため昨年  
中當方より貌利太尼亞へ使節を差向し折輸入税之一二を減少すへき事  
を契約せり

一 此廉免許ありしに因て神奈川港は日本正月元日千八百六十四年長崎及ひ箱  
館港は二月朔日千八百六十四年より酒之諸類及玻璃は五分税を相減へし  
一 前に記たる品之外亦相添し目錄中へ書載せし物品之税も改め減し同日  
より取行へし

文久三年十二月 板倉周防守 井上河内守千八百六十四年第二月五日  
請取

- 別紙 左之品々は六歩之減税たるへし  
一 飭物 一 鏡 一 香水并石鹼 一 紙 一 圖 一 武器 一 書籍 一 刀物  
左之品々は五歩之減税たるへし



- 一 マシーン并マシーネリト具したる機械并機械中之小道具
- 一 藥草并藥種
- 一 塊鐵并棹鐵
- 一 鐵板并鐵線
- 一 プリツキ板
- 一 白砂糖
- 塊なれる品
- 一時計秩時計并時計鎖附リ阿片輸入嚴禁條約面之通りたるへし
- 茶を製し及候を碎きたる品
- 荷造するに用ゆへき左之品々は無税たるへし
- 一 蕙并藤
- 一 繪之具油
- 一 青袋
- 一 ジツソム石炭之類
- 一 鍋并籠譯マルキユスオーフロウルス眞字チャルレユーウキンチエストル
- 右通辭三嶋米太郎より差出

二九 紀伊藩臣水戸藩臣等尾張老主慶恕卿へ建議之事

紀伊殿家來

謹上

里見二郎いかに甕夫

水戸殿家來

芹澤又吉孝幹  
 夢原八郎明聰  
 高木内藏太正路  
 黒澤仙次郎盛茂

外臣甕夫孝幹明聰正路盛茂味死百拜謹る書を尾張中納言殿下に上候臣竊に天下之勢を達觀仕候に癸丑以來  
 朝廷外夷之 神州を覬覦致候義を 御憂慮被爲在幾度と無之蒼生之爲に哀痛之

詔を被爲下攘夷之義を 尊諭被爲在候得共幕吏兎角遵奉不致和親交易相續る日々盛行れ國力疲弊民心怨離仕實に奸雄黠賊之隙を窺之場合に至候然處癸丑より今年八月に至迄は朝意攘夷に御一決確然不拔之御諭被立有之候に付幕吏内實和議を相好候得共陽に無據攘夷之議を唱彼是周旋之振相示し且姦雄之徒も正議之名を借自己之欲を逞可致様相謀候



得共去る八月十八日京師之變より長藩君臣多年之勞苦一朝に空しく相成賊名被負候次第相成正議忠直之公卿方は不殘讒黜被致攘夷之論追日誤失國力因は一變仕候墜地などの字ならんは神州挽回之期は何を可望哉と痛哭泣涕に不堪次第に御座候當時在京諸侯松平春嶽殿島津三郎宇和島伊豫入道肥後白河等追る土佐も上京可被召様子に候都る一體開港和議を主張致首として彈正尹親王を語らひ碌々具位之公卿は唯利を以て其心を相惑し

朝廷之上をして鎖港攘夷之義は恬然置る不被爲聞候仕向と奉洞察候就るは大樹將軍も速に御上洛被爲在様取扱和議一定之策を彌縫委曲周旋可申中心にて可有之候若公卿異論も有之候は、必罪名を羅織致し貶黜幽閉等を可被加乍恐  
聖上之御信にも被爲係候も難計尤先日小栗豊後守小笠原圖書頭之舉にても姦吏之意は相知可申候松平肥後守様には決る御別條無之候得共浸

淫終には不覺其中に御引込れ候も無覺束奉存候何分徳川叛朝不義之責相重り海内人民蹙額して幕政を相怨候様成行候薩之姦謀姑も相遂へく候嗚呼可憎可怨之至には無御座候歎左候は、此度大樹將軍御上京被遊若も薩賊之邪謀に被爲陷候は、益々多日神州之大邦を擧る忽ち犬羊左衽之俗に被相變可申事目前に相見候左も無之東照宮之御遺澤必地に墜御血食之無覺束成行可申を臣等一念此に至る毎に食不下咽座不安席候申上候通當時之勢  
朝廷外藩を合せ力弛み氣屈し候様相成候事故是非此上は徳川氏内より振起不致候は神州挽回之期とては更に有之間敷候幸に殿下三親藩之首に被爲備大徳高明憂國之意殊に深く夙に醜虜之害を被爲憂慨然御身を以天下之事御任被遊或は姦讒之爲に被爲妨御幽閉迄も被爲忍候に付

聖上之深く御倚頼被爲在近年大樹將軍御補翼之任も被爲蒙東西御周旋



被遊候十餘年之御功勞可奉恐可奉感言語カ之盡所に無御座候伏願は不日御乘輿を西せられ御上京被成下一橋中納言殿へ御熟諭被遊聖上は勿論諸公卿迄も和議邪論に御惑溺不被爲在候様斷然神州之安危生民之利害を御説得被遊續而諸侯を會集被在遊邑諸侯は追々御招登せ被遊攘夷速決之議を御主張被遊愚人之惑を解姦人之隱謀を被爲折正義一致皇威相振候様必死御盡力被成下度謹る奉渴望候是臣等之獨渴望而已ならず天下士衆も奉渴望所に候然處臣等殿下之前に於る申上兼候二事有之候是を申上候得は左右之意に忤之恐不申上候得は忠と信とを相失可申寧左右之意に忤ふとも忠信を不可失と相心得不憚忌諱奉申陳候殿下之前に紀伊中納言殿と御相談之上十月二日攘夷勅使御猶豫之御願立被遊關東へ被馳攘夷御周旋に相成其後殿下御歸藩被遊候而今日迄も何之御沙汰も寂然と御控被遊候は全く深御趣意も可被爲在候得共今日之事決一介之使之可辨所に無之唯虚飾之御處置と

のみ誹り候道路之説も傳承仕候此暴評一度耳に至る實に口惜奉存候内  
實事情探索仕

勅使猶豫之義全く島津三郎等宿謀にて已に九月晦日内議相決し有之候哉にて幕府之攘夷を遅緩爲致其罪名徳川氏中に相歸候様相仕向候策と相見薩州之奸たる事鏡に懸る如く候薩州之賊勢を弱め候は第一殿下卓然たる正義を御主張被遊正義之諸侯因幡備前阿波上杉等之族を引る應援被遊續而在京諸侯就邑諸侯を交代招集被致一藩に而も邪議を去候而正義に就き

朝廷之上も因循之論相絶候様被遊候は、薩州は孤立と相成其勢何となく相折可申歟是臣等之難言所一つ也松平肥後守様元來幕府之爲に御信義を被爲立別る春來數百里之路を不被爲遠厚く御國力を守京之用に被爲用奉敬服候乍去幕府之御處置縱令俗論に而も邪議にても唯々愆憑相助幕威を相張候得は御忠節と御心得被遊候より八月十八日之一舉も薩



州を被助長州を壅蔽之義も全く薩之驅役を被成我掌中之物之様に思召  
込被成候得共反る薩之奸計に陥り幕府を不義に引入行々奉斃手引に被  
成候と同然に相當如何之残念至極奉存候殿下は肥後守様御實兄にて被  
爲在候得は猶御上京之上薩之奸計を深く御辨説被遊肥後守様も御發明  
御會得被成御舊惑被爲解候に御合力奸賊等被爲斃候様一際御盡力被爲  
在度奉嘆願候是臣等之難言所二つ也誠に卑賤外臣不肖之身分天下之重  
事を僭議仕候義恐縮奉存候得共 神州之御落録は勿論徳川氏之御命脉  
も今日に至る差迫り日夜痛心之至各其義奉願候周旋可仕候は必當時機  
切迫處置遅緩に相成候は難得之時機終に相失尊藩へ罷出萬死を犯し  
上言仕候萬一臣等之情御憐察被成下御採用にも相成候は、死とも遺憾  
無御座候奉冒威尊不堪戰越惶恐之至 失月日今全文を按するにけだし十  
一月比のものならん可考

三〇 長門藩主奉 勅始末奏上之事

癸丑外夷之事起りしより戰爭に決し和議を斥け候を以度々幕府へ及建  
言戊午墨夷之請閣老を以御窺に相成

勅許無之列藩へ議下り候其節も

叡慮遵奉之主意を以待夷之良策被建度段建白仕候處幕政因循終に上毛本ノ  
上已之變を醸し候次第不忍傍觀家臣有才者長井雅樂敷を撰ひ 官武間之周旋申付  
於關東は一橋越前前々登用申立候得共不相叶田安上京板倉閣老に擢任  
と申迄に議定り一先

朝廷向御様子御伺仕らせ候處豈計家臣之者愚意取失ひ自己之及密疏幕  
議を張り

叡慮を歴し候様之取計せしめ候に付速に嚴罰申付奉霽 宸疑彌以盡力  
候様厚き

朝命を蒙り候に付其節先年來被 仰出候



勅諭并 御沙汰書に當り候二字脱ならん御定議之御旨奉窺候事 六箇條之内下  
田條約通りは御不本意なから御許容被遊候御事歟と御伺申上候處御付  
紙を以下田條約尤不被爲好候得共既已前於關東爲濟候上言上有之 嘆  
思召候處重て僞條約實條言上實に被驚 思召廿六日御別紙之旨無餘義  
被 仰出候義にて

勅許は無之其後關東より言上御約定拒絕可有堅固御約定は且又蠻夷追  
々驕傲狂猖カ下田條約今と同日之論に無之以之外之義當時に至り候下  
田條約被爲許可然とも難被 仰出僞條約は御破却御拒絕被遊度 思召  
に候との 御答被 仰下候に付御確定之  
叡念始て伺定候に付彌決心

叡慮貫徹候様盡力可仕と家來共へも堅く申聞せ長門守關東へ差下右窺  
濟之外 御赦宥一條追々遂其節候由に付此餘は攘夷之大義一途に周旋  
不至不は

叡旨貫徹之驗相立間敷と考へ最前窺定候下田條約假條約共御破却御拒  
絶と申

叡慮之所被爲向を幕府へ精々可申解旨書面を以前關白殿下へ家臣差出  
言上仕らせ候處委曲御領承被成其後言上之趣全

叡念御符合之段被 仰聞候に付其段長門守へ申遣猶又攘夷之儀幕府に  
於て彌決定列藩へ布告策略之次第拒絕之期限等衆議可及 奏聞旨 勅  
使を以關東へ被 仰遣右同様之 御旨被 仰聞周旋盡忠候様との 御  
内命正親町三條殿より御書面を以被 仰下候に付長門守事は於關東徹  
力を竭し越春嶽土容堂も素より同論同志之上老練にも有之不容易受驅  
曳且々も遂其節候不幕府遵奉之次第を歸京及奏 聞

叡感之旨被 仰聞候最前於關東將軍家上洛之儀及建議御採用相成居候  
に付右 勅命遵奉之上は列藩へ策略見込相認上京前迄に差出候様との  
幕令有之候得共大膳父子に於ては



叡慮之御深旨は戊午年來之御決定にて戦之勝敗は必御算定被爲在儀にては無之唯 國體之立不立義理之闕不闕とのみにて

聖斷被遊候御事と奉窺其證は戊午二月廿三日閣老へ御渡相成候 御沙汰書に今度之條約とても御許容難被遊思召候衆議中自然差違彼々及異變候節は無是非<sup>義とカ</sup>被 思召候と有之候得は假條約破却と申事に相決候に付天下一統決戦と心得勿論之事に可有之と御伺申上候處其節條約破却一決候は、先達也 御内沙汰之通尤天下一同決戦勿論就るは防禦速に相整候様被遊度御付帯を以被 仰聞候午年にてすら無是非義と被遊宸斷候御事に御座候得は今日に至り假令武備不充實とも攘夷之延引可相成理無之は天下之公論

宸斷之御旨實に 天祖より御受傳之

皇國眞武正氣は奉感戴長門守并家臣共へも此旨趣重疊申合於關東幕府其外へも伺取之儘を申傳させ候處

勅旨遵奉と申事に相成自是は自國引請之武備假成にも取整期限決定候は、他に後れを取間敷と父子申合候得共從

朝廷御差留も有之旁長門守儀京都へ殘置於大膳大夫は速に歸國々政改革武備假成にも整候内將軍家上洛列藩集議將軍家滯京十日歸府廿日後は必拒絕と御情之由にも相聞候得共彌御決定之儀相分候に付當三月十二日長門守より家臣を學習院へ差出攘夷期限彌何日比に御決定相成候哉と手控にして御問出仕らせ候處翌十三日御付札を以四月中旬決定と被 仰聞候段國許へ申越致承知即時に國內布令いたし候は四月中旬迄は應接不得止征討中旬後は直様征討と相決要衝之場所へは戍兵差出置候處夷舶不來警戒仕居候内四月廿一日傳奏坊城家より外夷拒絕之期限來る五月十日御決定に相成候間益軍政相調醜夷掃攘可有之との 御沙汰有之同月廿三日同家より攘夷期限五月十日無相違拒絕決定之段將軍家御請有之候由御達に相成右御請書をも被相渡幕府よりも攘夷之儀五



月十日可及拒絶段御達に相成候間右之心得を以自國海岸防禦筋彌嚴重に相備襲來候節は攘夷致候様水野和泉守より達有之候其已前三月十八日之幕令に攘夷之

詔御奉戴に付早々拒絶之應接におよひ外夷承服不仕候節は速に打拂候様にと有之候付警戒彌以嚴重に申付竟に五度馬關之戰爭に及び素よりはかゝ敷軍も不出來候得共

叡慮遵奉幕議承順之寸志を相違是よりして彌以國政を一新し武備を全治し

皇國御武威を海外へも輝候様仕度と日夜苦慮仕居候處因州浪華一發の砲聲のみにて眼前小倉之如きは我苦戦之狀を傍觀し隣交之情誼不相辨候に付

叡慮幕議之貫徹如何成障有之候哉微力獨任にては一身一家之分をは盡し候得共 全國御持堅め之目途難立事と考へ其段及言上列藩へも使節

浪華に於て  
因幡の戌兵  
攘夷は六月  
十四日也

を馳せ應援を乞且其見込をも尋問し又

朝廷よりも列藩へ無洩御布告相届候様相願候處恐多も期限不相違速及掃攘候段

叡感不斜御旨蒙 御沙汰猶又態々監察使御下向に軍勞を御慰撫有之全國感激死力を盡さんと決心仕候左候而筑前其外五藩へ應援之 御沙汰も降り追々列藩之厚意を辱す然處於關東は和蘭も魯佛其外同様之御處置に相成候儀御主意柄難相分と候四月廿一日

朝廷より被 仰出候趣水野和泉守より三港奉行へ申達候通には不取行旨申出候由に付於大膳大夫は和蘭之儀他夷同様拒絶可然段既に御伺仕居候事にも有之其上一旦兵端相開候後に付最早穩便難取計段幕府へ申立置候其後一橋よりは閣老并大小之有司同心仕候者一人も無之との儀關白殿下へ書中を以言上有之候付京詰家臣等へ 朝廷御尋に依る將軍家小田原迄被罷歸



聖旨貫徹候様處置有之候は、一段可然儀と内密御答申上候由に付斯迄將軍家苦心之事に候得は一橋詰合屹と貫徹之驗可有之と考居候處豈計於大坂六月十二日水野和泉守より夷國拒絕之儀に付了解難致廉は可相伺猶横濱談判中未御手切に不相成内猥に兵端を開御國辱を取候に付彌御手切之達有之候迄は渠より不襲來は粗忽無之様との儀家臣へ申聞有之候得共既に

叡威之御旨被 仰下家來末々迄勉勵之折柄

朝旨幕意と齟齬仕候様に於は甚不可然儀且國之榮辱は戰之勝敗には有之間敷只正氣之盛衰を以榮辱を分ち可申猶又拒絕之儀に付了解難仕廉無之由相答置候處又々於江戸今度京都へ被仰立之旨も有之拒絕之儀は勅命に候得共策略は御委任に付此上彌打拂候迄は幕令相待航海船へ發砲差控候様との儀密封にして渡方相成候得共  
叡慮遵奉に於拒絕期限御請有之候に付即ち幕意を承順して掃攘之及沙

汰候間妄動とは不心得又國力を不顧義心作興を以要務と考定追々及建言候事に付幕府之策略も愚考を以御採用相成候事と相考何分只今戰鬪相止候は一藩之動亂不容易段相答候彼是之應答道路相隔書中意味難解儀も有之たる哉竟に幕使下田に相成五月十日夜亞船へ發砲并外夷拒絕之儀は談判決定不相成已前襲來にも無之船へ妄發之事詰問有之候に付拒絕期限五月十日と御請相濟候段從

朝廷被 仰聞候付期限よりは夷船と見受候は、可打拂様及沙汰置候に付十日之夜國柄は不辨候得共夷船と見定及炮擊候猶又談判に於は拒絕之驗不相立驗不立は拒絕とは難申談判は拒絕前に有之事と相考且夷情難計通行襲來何れにて差別可相立哉期限よりは必戰と心得居専ら沙汰筋を守り及奮戰候事に付妄動とは不考段書附にして關東へ申越置其後は爲何義も不申來候得共將軍家之忠誠

勅意遵奉之上拒絕期限を書附に迄して言上有之依之以一橋之賢明且上



洛中拒絶之應接振を從

朝廷御尋有之候節一時和親交易取結候得共元來不經奏 聞開港候事故  
闔國人心不居合之廉可申渡との答書有之事に候得は談判にて拒絶期限  
延引に及候共幾月と決定致兼候儀は無之筈其節中川宮御建言にも掃攘  
之儀遅々致候より國內一致之場に至らす既に及接戰候得共列藩拱手傍  
觀切齒に不堪云々猶又攘夷先鋒被蒙 仰度御懇願も有之是畢竟戊年に  
も

聖察被爲在候通有司之不取計に出る事歟と考居闔藩其疑も抱き憤懣之  
餘り幕使旅館へ何者共不知令狼籍候様之儀出來致候半と鎮靜方苦心不  
大方候右様

叙慮遵奉幕議決定之上猶も不徹底之儀有之候は如何成故に之候哉奉對  
天朝申上候は恐多候得共

叙慮彌以御決定卓然たる御實行天下感動仕候程之

宸斷被爲在之外御處置も有御座間敷と奉愚考兼之奉伺居候

御親征之 思召此時

宸斷被爲在度御事と石清水迄

行幸暫於彼地御軍議攘夷之御驅引被遊候様にと家臣を關白殿下へ差出

内密建白仕らせ候處大和

行幸 神武陵并春日社等 御拜暫御軍議伊勢 神廟御拜可被遊との御

旨被 仰出誠以驚起感奮仕自國攘夷も懸念には候得共父子間申合供奉

申上度理裝罷在候處八月十八日堺町御門へ干戈を以多人數出張有之候

に付警衛差出置候家臣等兼之申付を相守り覺悟も極居候得共 九重

近き御場所柄奉憚 朝威武備嚴重に仕居候内御門御固め御免有之 勅

使を以攘夷御倚頼之

勅命をも被 仰聞候付京詰人數國元へ引歸其後上京御差留九門内之立

入御禁止且家臣共不束之取計有之候に付取調候様との 御沙汰に候得



宗謝枋得評  
胡銓上高宗  
封事曰肝膽  
忠義心術明  
白思慮深長  
云々亦云爾於  
斯至其忠厚  
難烈所關係  
功不與抑童  
固可抑童  
同語抑童  
諫年語抑童

共憚 朝威忍勇憤候段而已申出兼申付る處之尊攘之大義を相守り候  
ろ之取計にて格別御咎科可申付程之儀無之此餘 宸疑難被爲霽趣も被  
爲在候は、乍恐父子共 玉座近く被 召出従前段之始末委細に言上仕  
度其上にも猶も  
叡慮に不相叶幕意にも違候事に候得は如何様之 御譴責を蒙り候とも  
聊遣恨無之と決心仕猶八月廿五日御書附を以勤 王之諸藩不待幕府之  
示命速に可有攘夷之由  
叡慮被 仰付候に付闔國之士民彌以攘夷之布令嚴重に申付候 月日缺  
（文久三年）但し長門藩舊冬被差出候と奥にあり謹按するに 澄良二公子の建  
議中に舊冬井原主計を以云々  
とあるはすなはち此事  
ならん猶考向すへし

二九 征夷將軍上洛 勅命之事

過日横濱鎖港取掛之旨言上委曲被  
聞召度候間一橋中納言可有登京被 仰出有之候得共猶又大樹にも被  
尋仰度 思召候間引續早々上洛有之候様被遊度旨  
御沙汰候事

十二月十一日（文久三年）

尤過日 御沙汰之通一橋中納言にも可有上京候事

三〇 横井平四郎等被罰之事

横井平四郎

其方儀傍爾犯禁に付るは及達候趣も有之候付諸事謹慎を加私之宴會等  
相憚可申處去年十二月十九日之夜都築四郎吉田平之助申談江戸町家に  
於て酒宴相催候席に狼籍者共拔刀に罷越見受候は、俱に力を合相當



之處分も可有之處四郎平之助成行をも不顧其場を立去未練之次第士道致忘却御國辱にも係り重疊不埒之至に付屹度被 仰付候筋も有之候得共御宥儀を以被下置候御知行被召上士席被差放旨被 仰出之

吉田平之助後家

右は數代御知行被下置候家筋に付此節御僉議之趣有之別段を以右後家へ爲御救八人扶持被下置候條此段可被申聞候事

都 築 四 郎

其方儀江戸詰中去年十二月十九日夜吉田平之助横井平四郎申談於町家酒宴之席に狼籍者共拔刀に罷越手疵を負せ候とは乍申平之助儀深手を負候は、俱に力を合相當之處分も可有之處其場を立去候様子に相聞未練之次第士道致忘却御外聞にも係り不埒之至に付當御役被差除被下置候御知行家屋敷被召上士席被差放旨被 仰出之  
右之通文久三年癸亥十二月十六日八ツ後御奉行所において被 仰付候

當時俗問流  
布の狂歌あ  
他日に載ふ  
り此に備ふ  
逃出してう  
そつひわけ  
なついき出  
死恥よりし  
だぬがよし

事

三一 或人長崎客中より申遣書狀之事

さて横井平四郎事に付得貴談候間申上候爪生三寅と申者口上儘元來横井平四郎之徒越前當主を押込再春岳公を押立越前は越前一手にて天下之業を起し江戸は不足願との決著にて御座候然處江戸より越前守様へ出府申來候得共横井徒支礙へ國中言語沸々然たる處越前守様之御論には自分は小身より來り當家を襲候故何分將軍家を難輕蔑候自然越前滅込に相成候而は先靈に對し不孝不忠也とて總登城被申付右談判に相成候處皆々御直に難御受歸後相考御答可申上段申上候内長谷邊玄平横井徒也高聲にて江戸參勤之事を申者は斬棄へしと相罵り申候是時本多藏之助水戸老公之息子之由春岳公より貫ひ臣とす 進出申候には太守江戸御出府之儀至極御同意申上候



間私一人に御受申上越前國中は私御預り可申との事に付越前大抵是に從ひ直に越前守様御出府に相成申候依之横平より春嶽公へ種々論說有之候得共一圓御用無之由横井は死刑にも被處筈之處他國人にて有之且又今迄御推舉に相成一時貶落に相成候は世間見聞も悪く至る穩便に横井を還しに相成其徒三岡八郎列蟄居被仰付候よし横井か歸之節は越前若侍共道に待受斬殺手段之處横平裡手より船に乘し逃遁いたし候由當時從來候面々は横平と同様打果し可申筈之面々に決る越前重臣に無之由左候得は御國許に家老や奉行と申候事頓斗詐謀にて御座候

一横井越前へ入込候より質素之風變しへやすみ之面々といへとも絹服をなす事になれり

一家中下々をしぼり候間越前家中大に困窮いたし國中横井を不知者なし又横井を不惡者なし

一横井越前にては妾三人を置夏は常にはだかになしゆもしもかゝさず笑者御座候得は却て越前は不開國と笑申候由

其外越前様金錢を絞込み候奇談難盡右迄荒々申上候

右爪生三寅と申者は越前之人にて十一月廿四日越前發足十二月廿三日此許へ著私共當時同宿仕居申候以上

十二月廿七日 (文久三年)

### 三二 衣服復舊之幕命に付御達之事

熨斗目長袴繼上下之儀前々之通着用之儀從公邊御觸有之候に付繼上下着用仕來候面々は來正月より着用可有之候長上下之儀は當時非常之御儉約御年限中に付年頭御禮にも着用に不及熨斗目之儀は是迄之通公邊へ係り候節迄着用可有之候右之通被改候も其餘御省略之儀は去年十



二月被仰出置候通相心得御手元を始御節儉筋之儀は聊御變革不被爲在候に付御家中之面々も彌以御趣意を奉し武備充實之心懸專要にいたし衣服飲食を始萬事質素節儉筋に深く心を用候様可申聞旨被仰出候條奉得其意組々へも精々可被示置候以上

十二月廿三日 (文久三年)

探襍錄卷十五

夏之部自四月至六月 ○元治元年

一 水戸藩尊攘之士蠶起之事附無名氏書翰之事

筑波山へ立籠候者之儀に付御届奉申上候弊藩脱走之人數に於彼者事勤王 攘夷存込而已に於御座候間私に於て鎮靜方致兼候尤攘夷御一決相成候得は如何様共手を盡し鎮靜可仕候以上

四月 (元治元年)

水戸殿

田丸稻右衛門

水戸浪士常州伊多子村赤山川村へ屯いたし居候惣人數三千人有之其内筑



波山板敷山へ千人餘も立籠其山道に浪人數ヶ所番所を拵往來人を改候由何方より加り入候哉軍用金貯多分に有し候由去る八日野州宇都宮へ貳百人も罷越候其由來は今般水戸前中納言殿木像を拵白木造りに仕立輿入れ陸尺四拾人餘に白丁烏帽子著用爲致御輿廻り浪人百人も守護執節往古宇都宮大守彌三郎殿菩提寺へ乗込玄關には葵縮緬幕寺中には葵の御紋の布幕張詰浪人大將長棒へ乗騎馬槍長刀大炮持參立籠浪人之言分には是より日光山金之御幣と東照宮御神體之御木像と奉守横濱に出張攘夷之旗を上可然と申居候江戸表より宇都宮城主戸田は不及申酒井板倉本陣へ人數御下向に相成候得共乍恐四月十七日日光山御祭禮御延引相成候趣如何之御事と奉恐入候云々

四月 (元治元年)

## 二 水戸藩士廻書之事

尊 王攘夷は 神州之大典たる事今更申迄も無之候得共 神州開闢以來  
皇統御一姓

天日嗣を受嗣せられ君臨まし／＼威稜之盛なる實に萬國に卓絶し後世に至るまで北條相州之蒙古を塵にし豊太閤之朝鮮を征する皆 神州固有之義勇を振ひ

天祖以來之明訓をなせし志にて實に感するに餘りあり東照公大猷公には別して深く心を被爲盡數百年太平之基を御開被遊候も畢竟尊 王攘夷之大義に基つかれ候義にて徳川家之大典尊 王攘夷より重きは無之候様相成候は實にゆゑ敷事ならずや然るに方今夷狄の害は一日々々に甚しく人心は目前之安を偷み是に加るに姦邪勢に乘し憊儒權を弄し内憂外患日増に切迫致し  
叙慮御貫徹之程も無覺束



祖宗之大訓振張之期も無之實に 神州汚辱危急今日より甚きはなし假初にも 神州之地に生れ 神州之恩に浴する者は是ををめぐとして傍觀坐視するに忍んや僕等幸に 神州之地に生れ又幸に危難之際に處候上は 不及なから一死を以て 國家を裨輔し 鴻恩之萬分に報可申と覺悟仕候 仍も熟慮いたし候處必死之疾は固より尋常之藥石之療する所に非ず非常之事をなされば決り非常之功を立る事を不得況今日に當り上は 宸襟を奉慰下は幕府之武斷を助從來の大汚辱を一洗するに於てをや是に 痛憤難默止同志之士相共に東照宮の神輿を奉し日光山に相會す其志誓て 東照宮之遺訓を奉し姦邪誤國之罪を正し醜夷外窺之侮を禦き 天朝幕府之 鴻恩に報せむと欲するにあり嗚呼今日之急に臨み誰か報効之念なからむや又誰か夷狄の鼻息を仰き彼か正朔を奉るに忍んや既に報効之志を抱き又夷狄の狡謀を憤りなからをめぐとして因循姑息に目を送り徒に

神風を待候義實に 神州男子之耻ならずや諸國忠憤之士早々進退去就を決し同志戮力して上は

天朝に奉報下は幕府を輔翼し 神州之威稜萬國に輝き候様致度我徒之素願全く此事にあり東照宮之 神靈御照覽可被遊それはた何をか陳せん

月日缺 (元治元年)

### 三 水戸藩士等老中板倉周防守へ送る艸案之事

某等謹而松山侯閣下に奉言上候閣下御賢明に被爲渡候段兼々懽慕仕罷在候處一昨年幕府御大政に御預り被遊候以來御中興之御新政も追々被 仰出我々共に至迄實に大旱に雨を得候心地にも祖宗以來尊攘之大典を振興し夷積年之大汚辱を洗雪仕候機會到來いたし候得は乍不及身命を抛 神州之御爲は勿論幕府之御爲自分丈之御奉公可仕奉存候處其後次第に時勢



之變革も有之一昨年復古之尊業も半途にして相止み候姿に相成候而已ならず却て一層之大害を生し世之所謂四奸と唱候越前家保科侯伊達春山島津三郎等宮家堂上方を邪謀に引入上下を壅閉し  
天朝を奉欺罔未た外夷も一掃不仕候に却る内亂之基を醸し候儀大變之又大變にして天下之安危徳川家之存亡今日に指迫候上は假初にも神州に生候者一日も傍觀可仕場合に無之況や天下之大政に御預り被遊天下國家と俱に存亡被遊候御立場柄にては尙更之義と奉存候乍恐既に閣下には深く東照大猷二公之御明訓御遵奉被遊夫々御恢復之御事業御施行に相成候程に御座候得は今日に至り空く沈黙被遊候筋決して無之候得は全く時勢不得止儀に可爲在哉時勢を計らされは功を難成は勿論に候得共方今危急之場に臨み時勢に而已致懸念尊攘之大義御遵奉不被遊候は、  
天朝之叡慮に違ひ祖宗之大典を壞り眼前に天下國家覆滅を招き候儀にて誤國之罪は御遁れ難被遊筋に御座候得は閣下之御賢明にて決して時勢に

御泥み被遊候儀は有之間敷と奉存候然處只今以一號令一舉として天下之耳目を一新致し候御事業不被爲在候段如何御懷合に有之可申哉彼是苦慮痛心仕候得は實に骨身を碎く計にて至情難默止同志之者共申合日光山に相會申候御法度に觸候段は幾重にも奉恐入候得共斯る御時節に候得は寧鎖細之御法度には觸候とも祖宗之大典遵奉仕候は、こそ名義も相立可申宸襟を不奉慰候はは三千年來之御仁恩を如何可仕哉と存詰候儀に毛頭他念之御座候譯には無之候得は一同山内相愼罷在一書を以御程合奉伺候間不日に姦邪誤國之罪を正し被遊斷然として攘夷之令を布き  
叡慮御奉し被遊御事業天下に相顯れ候は、我々共如何重科被仰付候とも聊御恨不申上候若又右之義御六ヶ敷御譯にも御座候は、不得止東照宮之神輿を奉し東照宮之御遺訓に基き微忠相盡候心得に御座候間此段宜敷御披露可被下候恐々謹言 月日并姓名共缺 (元治元年)



四 宸翰勅書之事附大樹公奉 命書之事

幕府之儀は内は

皇國 治安せしめ外は夷狄を征伏可致職掌に候處泰平打續遊惰に流れ外夷驕暴萬民不安終に今日之形勢とも相成候事故癸丑年以來深被惱寂慮是迄種々被 仰出候儀も有之候處此度大樹上洛外藩より國是之建議も有之候間別段之

聖慮を以先達を幕府へ一切御委任被遊候事故以來政令一途に出人心疑惑を不生候様被遊度 思召候就るは別紙之通相心得急度職掌相立候様可致候事

但國家之大政大議は可遂奏聞候事

四月廿日 (元治元年)

右聖旨之趣謹を奉畏候家茂不肖不堪其任候得共盡精力職掌相立候様勵精

可仕候此段御請奉申上候

家 茂

別紙

一横濱之儀は是非共鎖港之儀成功可奏上事但先達を被 仰出候通無謀之攘夷は勿論致間敷事

一海岸防禦之儀は急務專一に相心得實備可致事

一長州處置之儀は藤原實美以下脱走之面々并宰相之暴臣に至迄一切

朝廷より御差圖は不被遊候間委任之廉を以十分見込之通處置可致事

但先達を被仰出候奉御首意處置可致事

一方今必用之諸品高價に付萬民難澁不忍次第早々被致勘辨人心折合之處置可致候事

前文之條々謹を奉畏候横濱之儀は不及申海防筋に於ても格別肺肝を碎



叡慮遵奉之微忠可相盡奉存候長州之義は猶又別段  
御沙汰之次第も被爲在候に付寛大を旨とし至當之處置可仕候此段御請  
奉申上候以上

四月 (元治元年)

家 茂

五 平四郎一類横井牛衛書翰之事

水府過激之輩騒立候概略當四月十一日聞取去廿日比より水戸御領分小  
川玉造と申處に郷士浪人相集横濱へ切込候存意之由他藩者も追々馳加  
り申候由凡二千人と申す攘夷鎖港之儀公邊因循手間取に付同藩武田耕  
雲齋催促之處延々に相成に付烈公へ對し恐入との事に非攘夷可致  
旨申談烈公之神主を作り與に乗せ昇て日光へ參り神君之神託を伺候上

横濱へ切入可申との由に右之内百五拾人宇都宮迄參り此節本陣に止  
宿致居候由尤御領主より被差留候由日光へ參候節は關  
守無異儀差通候由

一同藩久貝一之進と申に右浪人共常州道君芝とか申處に願筋有之者殿  
様へ取次相達吳候様相頼候由之處承知不致に付馬より引落致殺害一之  
進若黨十六歳に相成候者も共に致殺害候由右等之事公邊へ相聞宇都宮  
戸田様急に御暇に昨一日發途水戸家に非は是非同藩之手に取鎮候  
との趣に藩士立原朴節徒士頭相  
勤候仁 出立同千葉周作門人共引連取鎮とし  
て今朝出立候事

一 水戸御別家松平大炊頭出張之由  
一 右浪人共攘夷鎖港之名目に實は困窮之餘り蜂起共申候軍用金之申立  
に豪富共より二萬兩も取出候由市在共に困苦之段訴訟共申す  
一 浪人共三千程分金錢取立候由馬十疋人足十人之先觸と云尤筑波山神領  
屯し候由土浦笠間御領へは參らざる由



右概略は土州之探索家より手に入申候由る寫置申候書付有之候得共文  
意事長に付稜々拔集し奉拜呈候全く騒動之儀は相違無之秋田周防守も  
去十五日に爰許發足私共人數も見懸申候又公義衆之内に知音有之候に  
其方も十四日之夜請命即夕野戰炮手に發足と直話承候爰許一體は靜  
平に御座候得共長々應援と被存水藩因備等は長暴之次第了解不致角立  
居申候由に御座候

四月廿六日 (元治元年)

藏人様

横井

御物書中様

別啓仕候別紙は急速に相認候間御推覽被下御序に可然相願申候長州之  
動靜は京都表より言上も可有御座略仕候洋夷之光景は依舊横濱之商館  
等は益盛に取立當時輕業共致賑ひ候事之由に中々一鎖港之見込も存  
寄不申是非鎖港と申に至候は、非常之御出金有之公邊も困窮に至可申

且又長之御處置被差急可申渠等長と戰爭に及自然利を得申候は、其地  
は渠か有とする之恐有之候由既蘭艦二艘は横濱に著岸之由に御座候右  
は公邊之御雇奥平福澤藩士銻吉等より見込之趣等承候而京師之御都合次  
第には逆も一と變動に可相成誠に歎息之至に御座候尙傳聞之事情も御  
座候は、言上可仕候勿々以上

四月廿六日 (元治元年)

横井牛右衛門

六 因幡對馬大洲新谷之四藩士征夷府へ建言之事

方今外夷之患日々深く内地變且難測候得共上下惟然苟安尊攘之大典未  
御實効不相顯公方様連年御上洛況御新政之砌朝野刮目望大號一新中興  
之業正在于今日と奉存候間何卒區々之利害不被爲拘早々攘夷之儀御決



定不相成候は彼之汚辱を受て一日々々よりも甚敷加之諸藩疲弊 神州之正氣悉く消滅掃攘之儀彌無覺束奉存候固より攘夷之儀は積年之  
叡慮既に昨年兩度之

行幸も全く攘夷 御祈願之爲にして五月十日之期限天下に御布告に相成候事に御座候間速に御英斷に相成候得は 御國是一定不待號令而武備充實士氣奮興仕即 尊王之大典相立候御事と奉存候只當時之御姿に  
あは

御宸翰御請書御布告に相成掃攘之儀武備充實に託し横濱之一港を以天下之責を被爲塞徒に 宮室を増營し供御を増進するを尊奉之道と被成候様之御處置に  
あは昨年期限之御布告虚文に相成

叡慮廢閣尊攘之大典不相立のみならず人心離散草莽壯烈之徒憤懣過激之餘を名として處々蜂起致し醜夷機に乗して其強暴無厭之欲を逞し候は必然之理に  
あ天下之事不可爲に至り可申安危之機間に不容髮と奉存

候間不顧僭越之罪不避斧鉞之誅當今御處置之御急務と奉存候儀謹る左に言上仕候

一 昨年公方様攘夷之

叡慮御直之御請に相成五月十日之期限天下に御布告に相成候處其實効更に不相舉近來に至り一港鎖絶蓄銳待時之論を謀り得たる者と相立攘夷基本明ならず倡攘夷之説を唱る者も多是武備充實を以姑息を飾る之口實となし素より名義之存する所を知らず其一港を鎖と云は其實主とする所不戰に有之候處鎖港は元攘夷中之一節目に御座候間彼不服は即攘夷之御決定に候得は御成功可有之候得共初より不戰之御決議に  
あは償金之外無御座候たとへ僅に  
あも償金を以御鎖被爲成候  
あは此上 御國體を被爲失候之甚に  
あ却  
あ不如鎖と奉存候間昨年五月十日之期限虚文に相成大信を天下に御失不被爲成候様必戰之御英斷に  
あ公然明白に鎖港之儀内外に不被仰出候  
あは第一御名義不相立且當今之夷情苟も



必戰之御決定無御座候は一港を鎖とも御成功之御目的は更に無覺束奉存候萬一不戰して一鎖港相調候とも兩港に至り候へは向來何之御條理を以御攘斥可被成候哉其上一港を鎖し兩港を存する時は物貨彌溢出盡害彌深く苟も禍を後日に送り一時之儉安を而已して手を下し難き實に今日之比にあらず其緩急利害判然分明たる儀に付斷然三港鎖絶御決定に相成度奉存候是則今日大至急之御事に御英斷之遲速は乃安危之所關係と奉存候

一彦根侯安藤侯等は朝命に違ひ台命に背き國家を誤を以追々被爲蒙黜罰小笠原侯其後に償金を渡し全く國體を辱むるを以嚴典に被處候事御座候は攘夷之儀御決斷に相成候上は癸丑以來和親互市之條約全く一時奸吏之所爲今正其典刑如此鎖國攘夷神州之大體決る所以不可開之理奸吏誤國之跡決る所以不可不改之義得と御諭に相成候得は名義正敷彼若不服とも道在于我と奉存候然るに奸吏譎詐之末を追ひ彌縫脩飾を

以模稜曖昧之御談判に出候は彼見る事猶前日之如益輕侮之心を長し承服不致のみならず今日之御勇斷被爭候時は其名不正在于我と奉存候御邦内は申迄も無之外夷へ被爲對候も苟も譎詐之御舉動に出候は御國體に關係仕候儀に付公然如觀大御處置有之度奉存候

一長藩御處置は未御決定に不相成候得共紀州侯以下へ追討之御内意被仰出横濱鎖港之儀は既に御布告に相成候も却る治兵之御處置も無之新に通信之國も有之互市彌盛物價逐日騰貴に及候間道塗之人に至迄伺上意候處好惡參生疑惑候近比に至り外夷長藩へ來襲之說紛々に御座候間速に近隣諸藩へ應援之儀御達相成度奉存候苟も攘夷之儀御英斷應援之儀御達に相成候は長藩に於ては御處置を不待る恩威に感服致し自然平定可仕若攘夷御基本不相立候は假令何様之寛大之御處置に相成候共七卿并長藩必心服仕間敷奉存候右は御新政之初御存込之樞機今日に御座候と奉存候に付不顧身分在京家來共一藩之見込を以建言仕候



段借越之至奉恐入候恐懼々々死罪々々

元治元年甲子四月

松平相模守家來

山部隼太

安達清一郎

宗對馬守家來

大島友之丞

樋口謙之亮

加藤出羽守家來

森脇兵衛

加藤山城守家來

宮脇小源太

輔翼

齋藤佐次左衛門

馬廻り弘道館訓導

七 於筑波山尊攘奮起之義士分職姓名等之事

大將

田丸稻之右衛門

水戸殿にて奉行致候者

栗田源左衛門

鈴木虎太郎

黒澤新二郎

川崎九兵衛

武藤傳四郎

鈴木與八郎

高安秀木

脇部熊五郎

芹澤介次郎



使番 檜山三郎助

宇佐美宗三郎  
濱野松次郎

伍長 姫路新段組より出物見微部

小林幸八  
栗田源左衛門  
渡邊剛藏

總裁 藤田小四郎

木村久之允  
千葉貫一郎  
中村源五郎  
木村秀之助  
柳生郡之助

遊軍惣裁 戸田飛驒宇都宮家  
老職之者

竹田春八  
岩谷敬一郎  
邊田虎吉

右同 田中震一郎

木村六郎  
村垣誠一郎  
前田俊之允  
登時之助

千葉太郎  
東直次郎  
佐々木權藏  
小文泰助



伍長 三橋半六

小 泉 豐

豐田彦之允

長谷川勝藏

室町和太郎

西島軍司

長谷川勝次郎

大石重太郎

大石桂助

鈴木重五郎

鈴木猛

鈴木

横田藤次郎

右同 田中幾彌

使番 小田一郎

鈴木恒太郎

幕府旗本

瀧平主殿

池尻嶽五郎

伊藤右荒

先發 小田熊太郎

梅村與一郎

邊田虎吉

田村秀太郎

千葉小太郎

小荷駄奉行長副 飯田郡藏

横田藤一郎

飯田治三郎



伍長 大幡外記

堀 兵 助  
谷林與右衛門  
後藤太三郎

伍長 松脇後左衛門薩摩走人去春

原七郎太郎  
鈴木新藏  
江木戶良哉  
深谷四郎  
藤田中務

二木清左衛門  
川畑新兵衛薩  
高田與助

伍長 小橋新作

毛利藤右衛門  
中 野 連  
高野矢之助

調練奉行 山田一郎

金田又右衛門  
酒井金左衛門  
川際勇太郎

戶田 彈 正  
小林 幸 八  
石田 總 助  
朝倉 友 信  
天野 卓 治



本炮頭取 脇部本英

佐藤繼助  
後藤周吉  
西山謙之助

水田謙治  
岩田武志

二木清右衛門  
前江元右衛門

松延宿三郎  
松脇治右衛門

石橋榮三郎  
後藤兼次郎

此外農兵數千人

八一橋殿諭書を以言路を被開之事

我等事不學短才之身を以天下之重任後見職を汚候事既に三年身自ら反求に及候處今日之形勢に至候事全く我等徳器不相應故と深々耻入別る奉對公武恐縮無此上存候殊將軍家には英明に被爲涉萬機親敷可被遊折柄重職相汚可居事に無之候に付再應御免奉願候處

聖慮 禁裡御守衛總督攝海防禦指揮蒙 仰且

勅意遵奉精勵可致様分而台命も被爲在候次第一身に取リ冥加之至に候得共一同承知之通不肖之我等素より兵食乏敷身分を以右様之大任相蒙候筋に無之候間幾重にも御免可奉願筈に候得共當今不客易御時節於 公武深く御配意被爲在候折柄 嚴命重疊固辭致候筋に無之依て身命を抛 報國之心得を以御請申上候就るは自今以後我等一同と共怠惰因循之舊習を去り無用之雜費を省き賢を舉能を使ひ人々其職に應し上下一體合心戮力して今日之危急を救ひ政道一新一氣奮發守衛總惣之職掌を不汚 天恩幕府



三 忝きに背き不申様致度存候就るは我等言行政體を初其餘何事に不寄銘  
々心付候事有之候は、忠言極諫聊も忌諱を不憚申立候様致候也

子四月 (元治元年)

九 都下流布戯文之事

ゆかたの相談

常衣攘夷音近し

なあおかあさんゆかたがほしいから何にしたらよかろなあ

薩摩上布よ

上布は一昨年高ふ出して買て見たら此比大分垢付たから中川へ持て居て

洗ふたら色もさめるし地合も弱そふで一向常衣には中々ならぬよ

そんならかゝ絹でなんぞ染たらどうであらふな

さあ光琳菊と二葉葵とがいゝ模様迷ふた思案して見るとあちらへひつ

母 付心わるそふでは常衣にはなりそふにはない  
此處脱あるへし猶尋ねへし

強そふで常衣によさそふなけれど何分丈がない

母 それなら久留米じまはどうじやなあ

ありや色もよし随分強そふでよけれど幅がせまいから手がのばされぬで

常衣にはしにくい

母 それなら色もよふてがらもようて絹糸の光もありて地性も強ふて常衣に

もなりて世間の人氣にも合のは長州より外にないわいなあ

それなら夫にきめて早く登して常衣にしてもらひたい

三 藩賛

大隅が赤間硯よ悪くそれ時々畫さへも書よくい土佐



一〇 國友某小篠某長門肥筑之形勢事情探索書之事

一長州に金持三人居候由一人は萩一人は三田尻一人は得と相分不申萩に居候は商家にて藏一つたけ金子を充實致候様貯居候由三田尻之豪家は藏十六程錢を所持致居候由三家共に大坂商家に肩を比る程之富家之由此節長州國難旁移城杯に夥敷物入御座候に付右三家より以後御軍備筋之儀は一切受込申度願出候由尤熊屋萩の商家よりは一萬兩上金仕度願出候得共當時御軍用金いまた不足不仕候に付右之願出上金等御受無之由一長州一昨年來防劬山口へ移城に相成居候處當春右山口餘計之金子堀出る由定之大内家之貯金に之も有之候哉

一長州は昨年醜夷來寇以後は津々浦々之臺場々々に可然人體相選何方へ何某彼處は何某とて一人完將帥を差遣し受場々々は悉皆其將帥之指揮にて何事も山口へは問合無之獨斷致候様に委任有之候由其故東西奔走之疲勞無之安閑として敵を相待居候之餘程號令も相調候由

一近來道路之風聞不穩候に付長藩専ら防戰之手當有之候由海防は勿論其地方々々之口々に新關を構へ里塚を拔取山口之入口には往還筋は勿論間道迄も郭門を構へ兵士張番大小砲嚴重相備候尤此度御領内之銅器一切差出火箸に至迄悉皆鍊に相成候之大小砲御鑄立に相成候由

一長州御領内之人民百姓町人水夫梶取に至迄武藝相勵候由尤僧徒も同様東海之浦と申處は婦人迄も薙刀稽古致候由併長劬候思召に之左様に致候には無之由一體人氣婦女子に至まで戰鬪に決心致候より奮發致候由

一此節長州に之七卿御住居に相成御殿御造營に相成筈に候處三條様方思召に之何卒其入費丈の金錢を民百姓へ被分與度何ぞ此節下向自身之榮華之爲には無之候と被仰候得は聞人感涙を流さぬは無之益奉戴之意固く相成候由

長藩若年輩浮浪等娼家杯へ遊候者不少飲酒等も稍々長し候哉に相聞候に付君侯不輕被爲憂一日竊津々浦々之町人百姓に布告し明日は諸炮臺



に於て發炮有之候間騒立不申様豫め觸置諸炮臺一同に打立候得は聲響山野に振て夥敷聞ける是に依て右之遊女屋等へ參居候而酒宴酣なる面々も炮響耳に觸や否や取物も不取敢皆々暫時に所々礮臺へ馳付候而一人も酒色之爲に淫せられ其機後れ候者無りけるとそ君侯御感ありて面々右様之心得さへ候得は平居無事之時は隨分放蕩に無之様相樂候とも不苦と被仰候由

一長州より御建白に相成候得共追々中途に而相支候者有之不奉入

叡覽候由に付此節は乍恐直に

關下に罷出上表被差出候筈に而御使者被差登候處是又大坂に而被差留當處に而勸修寺様内并會藩人より應對上表受取度段申向候處是非共入京被仰付候様奉懇願候得共難叶との由に候乍併勸修寺様より此節之上表は我一身に易候而彌達

叡覽候様取計可申段御誓言有之候由に付漸く右上表大坂に而差出候由

然處會より猶又勸修寺様へ右上表は決而奉入

叡覽候儀不宜と強て申張候に付勸修寺様より左候は、差出申間敷乍併一旦長州へも身命に替可取計旨誓約致候事に候得は今一之添物を遣候間上表に取添差返可申との仰に而何そ外之物に而も無之唯今我首を打可被申左候は、我等が言葉無相違事をも長州へ相分可申と被仰候故左迄之事は流石恐入會も其儘黙止遂に被奉入  
叡覽候處如何之 御趣意は相分不中候得共  
聖上より 御宸翰長劾へ御下被爲在候由

案するに長州より三月御建白之節歟

一筑世子御下國懸り防州三田尻杯に而長州藩中と御對談爲有之由筑は内輪は長に通し居られ候由

一長防近來は夷賊襲來之用意專一之由赤馬關邊人民老弱は悉皆山口之方へ歟爲引取丁壯之者而已殘居候由尤賊艦洋中へ相見候節は直様馬關近



邊之市店民屋不殘自ら燒拂へくとの布令有之候由誠に必死決戰誠精之  
至處必ず 神祐も可被爲在勝利あらん事必せり

- 一 對州へ英賊船十七艘來居候由是より江戸へ廻り其後長州下關前通行直  
に大坂へ參り開港願立候由若赤馬關より及炮擊候得は直様可及戰爭と  
申唱候由例之虚喝ならん歟併開港之儀には越人杯は相談致居候由
- 一 肥前筑前杯は専ら大炮杯鑄立戰鬪之用意而已無他事候由彌以掃攘と相  
見候

子四五月比 (元治元年)

一一 福岡藩待井次郎兵衛より極密聞取之覺

- 一 四月筑前世子御歸國長州路御通行に付待井次郎兵衛喜多岡勇平兩人は  
大坂より直に乗船十日富海に著船十日富海に著十一日山口へ罷越御通

行之都合等致し且又昨冬御登之節御懸合之末に付政府令役人麻田公輔  
君側瀧彌太郎御使番國重徳次郎杯へ出會何卒悔悟之場に至り候様段々  
及論談候處昨年當春比よりも暴論一層相募り長州に於ては元來何事も  
叡慮を奉し處置致候事故少も此方より詫杯可致譯無之幕府にこそ因循  
之罪を可被謝答なと、申候に付此方より成程是迄幕府之御因循は御論  
之通に御坐候得共幕船を打幕吏を暗殺等の事に何分御尤之御處置とは  
不被存其上上下下之分も有之事に御座候得は逆も此方より御手を不被下  
候は相叶申間敷且折角攘夷之御志も御一國切にゐは残念之次第何卒  
皇國一致に有之度事に付右は壯年之者共一途に攘夷之筋を思込餘り過  
激に相成候處より危忽に及び重疊恐入との一言御挨拶に被及候は、忽  
御和熟に相成可申と申候得は彼方より其節は  
叡慮を奉し攘夷之周旋致居候折柄幕府より不都合之御差圖も有之候に  
付彼様成行候事に其節も一應挨拶致置候夫を又候度々挨拶致候は



返る幕府之非を鳴すと相成候間今更改る挨拶には及間敷との事に付猶  
又右御挨拶其節貫徹致幕府にも御納得に相成居候は、其分にて宜敷御  
座候得共全左様とは相見不申幾重にも今一應之御挨拶有之度段申候得  
は彼方より幕船を打幕吏を殺し幕府之御咎めを受候共薩州之船を燒薩  
易と怨を結候とも其邊は兎も角も宜敷夫よりも攘夷之筋相立候様御周  
旋こそ偏に願と申一向に話合出来兼候處同廿日世子小郡に御著翌廿一  
日晝比迄雙方重役之面々對話有之候得共矢張待井列懸合之節に相替候  
儀無之些大膳大夫様は御不例に御出會無之山口は御普請最中に付山  
口へ御招待も難出来依て長門守様小郡迄御出張御對話御坐候得共長門  
守様には格別之御話も無之矢張晝前之重役之話合に御君臣共に得と説  
は不落合物別れに相成候由翌廿二日晝後東久世殿御應對に相成候處攘  
夷之筋被致主張其他悔話而已に御格別之儀も無之由翌廿三日小郡御出  
立同月廿六日福岡御著小郡御滯留中應接振等は御上京之節よりは穩に

る役々も絹服杯致居候得共暴論愈烈敷唯々十八日以後を姦臣之所爲と  
相決し居於長州は毛頭之私心を挾不申事は十八日無事に京都を引拂候  
一條にても致推察候様杯一事々々譯を付辨解仕少も悔悟之色とは無  
之旅館之近邊至る物騒に奇兵隊杯處々立集り密談致し又は飛語流言  
甚敷或は黒田山城宿を襲又は待井列を打取杯種々申觸候に付唯々戒心  
致居候得共幸無事に御通行相濟候由

一長州大坂詰宍戸九郎兵衛折節山口へ參居候處極内密に申聞候には因  
州土肥謙藏杯昨年當春迄は長州之過激抑へ調和之説を唱居候得共近比  
は幕府不相替因循に付今迄之正義を益主張天下を維持候様頻に勸め候  
間筑前より悔悟之説を手強く説候杯聞候は當藩は扱置因州其地有志  
之面々怨を挾可申段噂仕候由

一御末家并御家老京師より御召登之儀は入京さへ不被爲叶位之事に御は  
迎も此方之存念貫徹可致様無之上京も無益に相成可申とて相止候由



一七卿之内澤殿は脱走一旦は但刃へ被參候處近比對州へ渡海との風評錦小路殿は近日於下關病死之由

一此節懸合之家老は根來上總福原越後に於益田彈正國司信濃は用事に於當時采地に參居候故出會無之由

一吉川監物より黒田山城旅宿迄使者を差越此節猶世子御旅館へ罷出候筈に御座候得とも本藩之聞も惡敷御周旋之妨にも返て相成可申候間態と差控候段申向に相成候由

一近々英軍艦長州へ襲來之聞御座候間筑前よりも應援致候筈に候由尤人數杯を長州へ遣候埒には參兼候得共長州を襲候船筑前湊へ碇泊致候歟又は領海を乘通り候節是非打拂候覺悟之由右應援之儀に付は世子御上京中御上書之趣も有之事に於且又一統之人氣も折合兼候故右之處に御決議候由

一二 久留米藩本莊仲太より聞取次第

一久留米候昨年來内大里之砲臺御受持に相成居候處此節御在京中御免に相成候に付當月十一日於十五日迄に御人數漸々引取候由尤大砲等は未小倉にも相整不申候間其儘御借受に相成候由右引取之面々話之趣に近々英佛之二國五千計之精兵を横濱へ相揃當月中旬より下旬に懸け下關へ發向上陸之上昨年暴發之懸合に及候段横濱夷人共より長崎へ申遣候を長州人承り馳歸候に付下關は勿論海岸筋大騒に於各家財を運ひ壯年之者迄爲軍役留置老若は遠方に立除夷船相見次第自燒之積に於必死に相待候由右は大意之趣書留申候

五月 (元治元年)

小 篠 熊 雄

國友半右衛門



一三 方今情實風說書抄出之事

一 仙臺藩桃井何某同志三百人計相かたらひ一手に而攘夷願出たる由先頃來水府亡命之衆と應援とも唱申候

一 上國九門御警衛も萬石以下三千石已上に相成候由さすれば外様には寄合交代ならては無之候間是も旗本番と相成實は

朝廷を取圍みたる形勢歎然し御番方も交代として六ヶ月替に被差越候筈之由さすれば在京之諸藩士は當五月限番皆引拂被 仰付幕吏のみ守護いたす筈之結構も被行不申と相見申候幕府は矢張富國強兵之後攘夷之 勅遵奉すと云張り居候由いつ方も日より見同意之藩不少昇平久敷富國すればする程人驕り元氣衰弱するは和漢古今之通患にて富國強兵は戰爭之世ならば可賞治平には尤可忌事なるを知らぬ世となりはてた

るは嘆も有餘

一 上國も猶雲霧蔽塞と相見へ近來之幕令に某月某日は

皇太子御降誕之日に付殺生禁斷又

先帝之御崩日にも殺生等致間敷杯云事を觸流さるゝよし海内は皆けし坊主の如き者計と概見するにやどうか

天朝を尊崇めかして内實は數年來攘夷之大義には違背致しつゝ其大罪をしも糊塗せんとする姦吏之淺智言語同斷誠にケ様之小人國家之柄を致掌握居候世の中如何相成候哉最早風說通來る七月長藩夷賊襲來を祈計に候とても干戈に不相成候は

皇威之御挽回は相成間敷奉存候西肥北筑等は長州應援之用意殊々敷模様に御座候得とも吾儕小人等は御國中靜泰にて緩帶鼓腹いたし難有御事に御座候穴賢々々さて右之殺生禁斷等に而尊 王と天下に思はせ且又夷賊より長州之御處置急に有之度申向候處彼表之儀は幕府之屬國に



付如何様共かまい申間敷夫よりも横濱箱館之鎖港は是非共致筈に付其心得致候様なと申渡に相成候段専ら申觸させに相成候由段々肉食家杯も流石はりこみ哉と被信向由

一 四月廿日之

勅書とて世に流布今以〇〇朝家を取さばき被申事歟と不堪嘆息候諸色高價之一條何故に高價に成ると云事を不辨に同じ長州一件扱々御情け無之事彼是何分御眞物とは存不申候得共當分

勅誼として出れば日寄見之國々は信仰致事と相見候間如何に相成ものに候哉乍併攘夷之申譯に横濱而已鎖せる筈之處大に紛紜致し一切埒明き不申由横井牛右衛門か溝口家へ遣候紙面之寫として見候處横濱鎖閉中々調兼強之致候へは餘計之賂金を出さゝれば不被行左様に相成候之は幕府彌以困弊に之笑止千萬且水戸浪人二三千筑波山へ屯いたし長暴之應援と相見其上因備兩國共に長暴を了解不致同意之由に之何様變事

にも及び可申嘆息之至且又外國より追付長州へ押寄候は、長防二國は外國より押領すへき恐れありなと三才之兒子むしけ起りて父や母へ夢はなしをする様なる事のみ長々と書立有之候を大流行にていつ方も取はやし中には權門勢家之衆感涙を流さぬ計に見申さる由扱々草臥果たる世の中と存候噫

一 因州對劔大洲新谷三藩士之幕府へ建言は何れも確論に之御座候彼中加藤家杯は小藩屏には候得共右様なる正議は誠に可美事に御座候ケ様之事も上之所好下に移る儀に付四藩主之英明も被致推察申候

一 橋殿將軍後見職固辭に付 禁裡御守衛惣攝海防禦指揮被 仰付候に付家中へ忠告極諫致候様被申渡之一札も見申候得共先年以來天下之後見いたし御國是第一之攘夷をは奸吏共より押へられて一身を挺し取計ひも出來兼其家中共も其時すら忠告極諫もせずして今日に至りて何を告諫するや又何の爲告諫を聞度被存候や言路を開き下情を問ふも時



により勢に乗する事に而今更如何なれば跡之祭に明君らしき直書とも出さるゝや可疑可笑事故寫留不申候

一横濱には近日夷賊共軍卒千餘人連來り夷館に居餘り候間宿所申出たる由幕吏板倉某左様之儀は一切難叶段烈敷はね切被申候處少しも弱り不申其儘上陸同所町家々々に入込候故大擾亂不得已本牧へ假屋作りて參らせらるゝ由嘸かし善美之御馳走と遠察致事に候右夷賊共は東海道を責上り搦手之心に而長刃へ發向と申立候由夫を實事之申分と大仰天被致由東海道百五十里足長に責上り又中國路百里餘攻下り候は、數日之勞兵三才之兒子たりとも討留へきは案中之勢又夷賊等も其兵機を知らぬ者やはあるへき彼か胸算は此節も例之金掠めと相見候處幕は仍舊儉安畏戰に陥も最早幕之金幣は被取盡可申求而彼か策中に投し候は抑如何なる白癡共シキにや江戸も近日又々町家及び焔燔庫等夥敷燒亡之由小人國家を治ればすなはち災害并藥と聖人之言葉何かは違ひ申へき

一〇〇〇近日彦根上知場之内江州神崎郡千三百石御拜領之由自裁許共に而は無御座哉

一川越侯横濱鎖港談判水戸侯へ御助力被仰蒙候由とふかよかりそふな模様とも相聞候得共鎖港承服せねは討果に相決たる者に候は、守文草創之事とは違ひ候に付立合相談にも及はぬ事立合相談船頭多出候事鎖港之出來さる印共に而は無之哉と存候

一一橋公へ水藩人原一之進梅澤孫太郎御借受御用人場を相勤候由所謂「たんと」の御方に異見をしられ今は切らねはならぬわけ「になれかしと祈事に候



探襍錄卷十六

一 夷賊之軍艦將寇浪華赤間關風聞書之事

此節上海に滯船いたし居候英軍艦長さ三十六間水兵三百五十名士官四十  
一人大炮百五十封度以下八十斤三十斤迄大小十八挺右將官より話聞取候  
趣は龍頓表近々海軍提督罷越候筈に付兵艦三艘を以大坂へ開港相願候た  
め馬關を過攝海へ罷越候筈若長笏炮擊に及候は、直に一戰を遂候筈右は  
西洋第八月我七月大坂へ罷越候、彼表に、重、面會可仕平井鍊次と申候  
越前藩士へ約定仕候或士官より話候趣は米利堅へより江戸海へ乗入候な  
らひ申候筈との事

五月 (元治元年)

或人長崎客中よりしるし送る所といふ



二 逆賊冷泉爲恭伏天誅之事

冷泉三郎爲恭  
と申候者之由

岡田式部

此者儀

王城之下に生育しなから尊攘之大典を忘却し前に永野義言に黨し後に酒井若狹に媚己か利欲を遂んか爲正義を排し正士を害し其罪枚舉に遑あらず就中廢立獻毒之逆謀に預り候は天地に不容大罪也是を以て先年同志之者斬戮せんと欲する所不幸にして打洩し其後行方不詳然處去秋剃髮形を變し名を心蓮と改め紀伊國小川より和泉堺に潜居し所謂天網恢々疎而不洩既端午晝時大和國丹波市之路上に生捕即刻天誅を加へ當地迄持歸令梟首者なり嗚呼尊王之大義を失ひ攘夷之明詔に背き候者遂に白刃に懸り候は必然なり豈唯此者のみならんや

五月六日 曉 正義士

右五月六日 (元治元年) 之曉北大室堂町南御堂前石燈籠之上に梟首有之候

三 征夷府急務外之件々奏 聞書之事附間々以御下札

官裁事及び一橋殿列奉 命書布告等之事

一 昨年中 御沙汰之趣も御座候に付別段之譯を以當子年より年々貳千俵

御神宮へ御供料御加増可仕事

下札格別之御事に付現米貳千俵御加増之事

一 關字平出等之儀如令條可相守海内布告之事

一 御誕生六月十四日仕置致間敷事

一 仁孝天皇御忌日六日



新朔平門院御忌日十三日

右例月其心得可有之海内布告之事

下札幕府精進日之通可心得候事

一大樹代替將軍 宣下之後為御禮上洛可仕候事

但實年十七歲以下以名代御禮申上十七歲に相成候は、上洛可仕事

一三家始萬石以上面々家督官位為御禮上洛可仕事

但十七歲以下は以名代先御禮申上十七歲相成候は、上洛御禮可申上事

一西國大名關東へ往來便伺

天氣可為勝手事 但滯京之儀は不可過十日事

下札諸大名城地往來之筋可伺

天氣事 但滯京之儀は不可限十日事

一國務是迄之通惣而御委之事尤 國家之大事事件は 伺 叡慮取計之事

紙御附 昨年 御沙汰有之通御委任之儀今更被仰出候迄も無之候但君臣上

下之名義を正し末々迄恭順之意相貫書附類鎖末之儀迄も心得違無之  
様可有之事

一朝廷御忌日には重罪は勿輕罪之者仕置申付間敷事

一九門御警衛萬石以下三千石以上之者へ可申付事

紙御附 萬石以上之者へ可申聞事

一諸社 行幸之事 但山城國內不遠場所に於春秋兩度位御定兼る被 仰

出諸人難澁不致様御手輕に奉願候事

紙御附 猶追々可被 仰出候事

一諸大名國産之内一兩品年々貢獻可有之事

但諸侯疲弊之折柄に候得は申合五ヶ年回手輕之產物以使者所司代へ差

出貢獻可致事

下札書面之通但武傳へ所司代より日限相伺武傳より圖之上其面々よ

り奏者所へ可差上候事



一親王丞相薨去於 朝廷廢朝之御方々は海内鳴物停止之事 但日數於  
 親王丞相は可爲三家三卿之通於傳奏議奏兩役も停止日數等惣て可爲老  
 中之通事

其儀被止候事

一宜秋門近邊御取廣相成候様可仕事 但

禁中より宜秋門は西方に而曆西大將軍之凶方に付當年は御見合來る丑  
 年又は寅年吉月良辰相選取掛可申事

一御築地東北邊御廣け御花畑

仙洞故院御取繕可仕事

一泉涌寺御掃際筋御手入等精々入念候様猶又可申附事

一禁中御賄向御改革向入念候様可申付事

一皇子皇女可成丈御法體に不被爲成候様仕度事

但御永續之良法等は評議之上可申上事

外札 箇條各書面之通候事

今度奏 聞仕候十八箇條之書面 御下札を以 御沙汰御座候趣逐一奉  
 畏候尤諸事

朝廷遵奉之道を盡し度誠意より申上候件に付八箇條目 御下札之趣は  
 啼合之筋にも有之別而不都合無之様可仕候

元治元年四月廿九日

一 橋 慶 喜川○德  
 川 越 直 克平○松  
 姫 路 忠 績井○酒  
 山 形 忠 精野○水  
 淀 正 邦葉○稻



聖主之御請書其外御書付松平越中守殿御渡に付印封を以相達候以上

五月十一日 (元治元年)

小栗下總守

瀧川播磨守

角倉

木村

上林

角倉

上林

猶廻達も各印封有之候様存候以上

#### 四 幕府於京師文武稽古所を建んとして書數之

##### 吏人を募れる事

當地文武稽古場御取建相成候に付き俗事取調候もの出役可被 仰付候間  
筆算相應に出來候もの取調名前可被申聞候尤御手當は毎暮に銀拾枚つゝ

被下候事

五月十二日午刻達 (元治元年)

#### 五 備前藩主上表之事

微臣茂政再拜頓首謹而奉歎願候今般野州大平山へ屯居仕候者共より封書  
差越則披見仕候處間觸忌諱候儀も相見申候得共積年攘夷之  
叡慮深奉恐察候且 神州正氣之衰替と醜夷猖獗之侮慢を痛嘆悲歎之餘不  
得止之情實より相發候儀と被察申候若年不肖之茂政是非得失も不相辨候  
得共實父齊昭存生中兼々教示仕候  
尊 王攘夷之大體に於ては少々耳底に存居申候故昨年來上京之つとく  
愚意獻言仕幕府へも屢意衷申述候儀に御座候然處於幕府無餘儀意味も御  
座候歟



叡意御貫徹之實効只今迄嚴然天下に不相顯物議紛々人心不服之趣に御座候乍恐當春大樹公上洛之節横濱鎖港之儀猶又被仰出も有之一橋中納言より御請も申上居候事に御座候得は早々實効相立可申様取計儀と奉存候折柄今度大平山之者共より申立候趣も御座候得は此機會に乘し幕議も彌早急に相決可申候間彼等志願之通何卒

勅許被爲成幕府へ御沙汰被爲成下候様奉懇願候素より彼等草莽鄙野之小人に御座候得共忠情之切實に至候は大邦之君子にも不可恥儀と不堪感激奉存候間何卒微衷之程御哀憐被爲垂被下候は、朝恩之程深奉感戴候儀に御座候依之右封書相添候奉嘆願候宜御執奏希入候恐惶謹言

子五月 (元治元年)

茂政

### 六 水戸藩忠義の士岡山藩主へ嘆願書の事

再拜稽首奉歎願侍從備前候閣下候小臣等艸莽巖穴之小人分位を超過し天下之大計を彼是奉申上候は其罪不憚と奉存候得共先烈公之教餘に薰陶致し尊王攘夷之大義を神州に生し候者は奴隸皂僕に至る迄此大義を固持し須臾も不可失墜之所以は聊知覺仕候苟も士林に列し候者斯る危急之時勢を傍觀仕候事實に志士之所愧に御座候抑當今天下之大勢を竊觀仕候に日倫月沈滔々趨下流候勢と奉存候去年八月薩會二藩設奸謀長門宰相を陥れ七卿を退け

廟堂之正義を奉拒隔候罪實に滔天之大惡に御座候天下之人同口に薩賊會奸と相唱奸賊之名已に定候者

輦轂之下に横行仕

廟堂之御大政にも參議仕候事不可解之一事御座候去年來攘夷之

詔令數々御布告に相成候得共今以横濱一港之鎖閉も不被爲在及遷延因循



候事不可解之ニ事に御座候於幕府君臣之大道御正し被進恭順之誠意御立被遊と御申立御座候得共恐多も奉迫

玉體候堀田備中守安藤對馬守誅戮削封之 御沙汰も無御座高厦大屋に安座致居候事所謂君臣之大道恭順之誠意名實相叶候事理には無御座候此不可解之三事御座候右三事は天下之大論大勢關係仕候事に御座候是則天下之大勢日淪月沈滔々趨下流事に御座候小臣等固より

廟堂之御大計を可奉伺得筋は無御座候得共方今之形勢に於は唯々先烈公之遺訓所謂尊攘之道地に落候事と奉存候草莽巖穴之小人

廟堂之御大計を彼是奉申上候儀には無御座候得共先烈公之遺訓地に落候と奉存候得は焦心裂腸所難耐に御座候乍恐小臣等如何様苦心仕候とも單身微力を以先烈公之遺訓を繼述仕候儀は固より其任にも無御座其人にも無御座只々滿腹存込候は一身之進退去就先烈公之遺訓を失墜不仕候様何分此上は攘夷之先鋒と罷成摯刀橫槩醜夷之陣營に討入奮死仕忠義之雄鬼

と罷成奉拜謝先烈公在天之靈候事小臣等之分に御座候隨ち同志之者共と相謀爲攘夷祈願日光山東照宮之御廟前に參籠仕罷在候乍然叨動干戈擅に私闘之所業に落入候は於大義之上慷慨不仕候間何卒攘夷先鋒之

勅許を奉捧度懇願に御座候得共 九重之天攀升に路なく空く巖穴に悲泣仕候而已に御座候伏惟閣下は我先烈公之御血統に被爲入且大邦之君臨に被爲在大義天下に顯明致し東西奉渴望候就中於小臣等乍恐我家君公同様奉仰候より誠に以唐突之至に御座候得共下顧非分冒鉄鉞之誅奉願候何卒閣下之御執成を以攘夷先鋒之

勅許を奉蒙候様御周旋被遊下候様萬死奉懇願候小臣等固より草莽巖穴之小人非分之願請罪無所容候得共先烈公之遺訓地に落候歟と奉存候得は只々憤愧悲悶神亂氣錯非分之事も忘却仕先烈公遺訓片端をも奉伸度心腸耳に御座候伏願くは閣下小臣等之重罪御寛宥被遊微忠之小志を御啓察被遊攘夷先鋒



勅許御願請御周旋被遊被下候得は千謝萬感不堪、之至候萬死奉待罪日  
光山之廟前候誠恐誠惶謹白

元治元甲子四月 日

田丸稻之右衛門

直之花押

藤田小四郎

信花押

竹内百太郎

延秀花押

岩谷敬一郎

信成花押

七 長門藩主讒誣辨解奏 聞及び同藩士乃美某

奉問之事 附藩主慶親朝臣之咏歌 天覽之事

一 癸丑墨夷之請不被差許候得は可及戦争と閣老言上候處無是非儀と被  
思召候御請奉

勅始末に申上候通に御座候是即和議を除戦争に決し候正義正理に而  
先皇攘夷之大典に可有御座然處此度即今之掃攘を妄擧となし武備充實  
他日之征討を以御大典と被 仰出候旨乍恐 朝議前年と御齟齬は被爲  
在間敷と奉伺候即今之掃攘より御手始に相成候は、武備も漸々充實致  
し竟に他日之征討も相整可申其次第をも不被爲立武備充實征討而已被  
仰出候は其實は是迄之御處置に不相替上已上元等之禍亂又々引起候  
も難測差當り諸價沸騰生民塗炭之 宸憂は如何して御安し可被遊歟如  
何程大艦巨炮御製造に相成候共六十州中夷狄同様之人心に相成果候は  
、最早 御國體之御挽回は御六ヶ敷可有御座利を捨て義を取り先人心



を御作興に相成候は、大艦巨炮は且戰且備に充實にも可至無不戰之精兵と申一語厚旨有之哉に奉存候事

一攘夷之

勅命藤原實美卿之矯と被 仰出候處實美卿議奏御役は去々戊十月十一日に夫より以前破約攘夷之

叡慮を窺定候節家臣之内開國航海之說に令密疏候者有之候處附は

御懸念にも被 思召候段被 仰聞早速其罪取糺し戊午年來

勅諭に付 御沙汰書之御旨都合奉承知候得共猶又委細御窺申上御付紙

を以被 仰出候

叡念御符合 官武周旋之儀

叡願に被爲在との 御沙汰被 仰下候彼是之次第攘夷之

勅命を午年より六年來之御結合

叡念之御切迫は無餘儀御次第に速に貫徹と被 仰出候儀は

勅文中毎々奉伺且又十八日變後幕府一之 御沙汰書にも迅速に可奏掃攘之功列藩へも

勅諭に勤王之諸藩不待幕府之示命速に可有攘夷と被 仰出候處定而御

矯 命には被爲在間敷哉と奉伺候事

一討幕之師と被 仰出候は如何様之

叡旨に被爲在候哉大和行幸御一舉に而も可有御座哉右は兼而

御親征之 思召被爲在候段一昨秋

宸翰内密拜見仕始而奉窺攘夷之

叡念貫徹仕兼候に付而は乍恐 玉體を以天下に御先立之御實行被爲顯

候は、人心感奮貫徹之驗可相立との御主意に而 石清水迄

行幸 宸斷被 仰出候次第委細は奉

勅始末にも申上候其節在京之因州米澤へは其次第家臣共より申入置候

由全以實美卿之御主議に而は無御座候然るを討幕之師と被 仰出候は



實に恐多御事と奉存候事家臣共狂暴と被 仰懸候三ヶ條は先達を委細奉 勅始末并取調書申上置候間改るは辨解不申上候微賤之者に候得共先祖以來恩顧之者に候得は條理明白從服候様諸事申附度奉存候に付微意之趣被 聞食分早々 御沙汰被 仰下度謹を奉待候 右先達差出置候奉

勅始未并取調書にも申上候儀に御座候此度 勅翰拜見被 仰付候に付乍恐猶又前書之件々御窺申上候間何分之 御沙汰被 仰下候様奉願候以上

原本註 私に云月日缺といへとも乃美伺書之末に記有之趣を推考すへ

し

昨廿五日御渡に相成候 御沙汰書退る懇考仕候處御文面中以來幕府へ諸事申上候様云々 右は此以後とても

天朝及奏聞候儀は幕府へも申立候様との御儀と奉存候得とも國許掛隔り候事に付惣而御委任と申御文言に自然相泥み以後之處於

天朝は

皇國重大之儀といへとも絶る

御直に不被 聞食就るは人臣其分を不得盡言路壅塞癸丑戊午之事之如乍恐

叡慮に背反し終に

皇國今日之形勢にも委至り君臣之道相絶候様心得候るは國中之動搖にも相響き不容易儀と奉存候に付乍恐此段御旨奉伺候以上

五月 (元治元年)

長門宰相内

乃美 織江



風につれあびく柳を春にゆへど直ある竹は雪折にけり  
右今度上書諸共に  
叡覽に備候由五月十日之事と乃美織江伺書之末に筆記有之候

八 輦下童謠之事

都屋お君

なるはいやなり思ふはならずほんにしんきな苦の世界

東屋お玉

人はとやかく御前の事でくらうせぬ日はないわいな

お中

色と酒とに迷はぬうちにはこんな人ではなかつたが

攘夷の職は  
誰が任ぞや  
方今萬民の  
塗炭は只攘  
夷の不行れ  
にありのみ

周防屋お長  
九重に雲が垣して隔てゐてもぬしでなければ夜が明けぬ  
同人

天に口なし  
人をしむる  
べしむる

六十餘に長州がなくは日本は毛唐人となるわいな

鹿兒島屋お薩

おし立は強う様うでも品玉男かはるしうちか受にくい

金澤屋お梅

おくれながらも今日このごろはふいとめを出す藪の梅

唐津や八十吉

おきのどくだよ野原の柳なされ次第のかせしだい

題人缺たるは故あるべし

敵は千人身かたはひとりおもふおかたはふたごゝろ

土佐屋お高



陰謀失著

ぬしも男じや今更人に遠慮するにも程がある

奥州屋お會

闇に鐵炮どの様にしてもまことにあたらう筈がない

博多屋お筑

物數もさのみいはすに都の人のすいてころばすつくし梅

阿波屋お徳

有るが中にも延立枝は見てもゆかしきことし竹

九 蘭夷艦將襲長門國風聞書之事

和蘭軍艦一隊三艘 日本海へ出張右三艘之内メテユサ船昨秋下之關通行  
之折同所炮臺より無故炮彈を發し船中所々打破候故水夫等手負或は及即  
死候間今般我國出張之船に申合一先江府へ罷越夫より一同下ノ關へ遣發

遂一同所和蘭國旗相立候旨メデユサ將デカーセンブロート名シヤレヒ將  
ヘーアーソアレレース申出メデユサは當月四日シヤンヒ船は一昨十一日  
當港退帆仕候

子四月十三日 (元治元年)

右長崎幕吏三島末太郎より内密報知書

一〇 闕下浪士逮捕幕命之事

古高俊太郎事<sup>辨カ</sup>椒屋喜右衛門と申唱四條小橋西に入真町居住怪敷所行有之  
身分不相應武器類并火藥致所持居候趣相聞候間此度召捕一通り相糺候處  
不容易隱謀有之間風便を待

原本の傍註に同心より手に入ると申書付には三條街池田屋源入宿に残り居たる書  
付に中川宮を焼討いたし可申との文言有之と云

本書并傍註  
共欺罔甚し  
と可言まさ  
に他日の論  
定るを待へ  
すし亦多言せ



御書向燒討拂可と相巧み徒黨數十人有之候段申立候尤同類共申通候證討書類も有之片時も難捨置候付夫々召捕候處未だ殘黨も有之中には身分姓名等偽り藩邸或は町家へ潜居候儀も難量萬一怪敷體之者有之候は、各藩又は所々役人共に召捕可差出候尤徒黨一味之聞有之候者探索之上召捕可差出候事

右之趣在京萬石以上以下并家來上京之面々へ不洩様早々可被達候以上

一一 都下時勢風聞之事

一六月五日京地に浪人者入込潜居いたし不申様御觸に成候得共當時も段々潜り居候由に付今夜より探り懸り候様との趣傳奏衆より御沙汰と云て御達に相成會津彦根桑名手を分御人數被差出候翌六日朝に懸動搖強く有之候三條邊會津手探索之ヶ所段々手向いたし候由七日八日に懸浪

人并町人杯生捕も多人數有之尤死人も段々有之候由又會津にも即死九人手負も有之候由惣體拔身之劔槍に而出立仰山に有之候事但生捕之内肥後國郡名不分松村重助四十三歳手負に而翌日死亡と有之候書付等不遑寫候

あいまに會  
ぞ實に疎暴  
なる

一會津手より探索之節東山靈山下曙茶屋にをいて人達に而土州之士を槍に而突懸候處深疵に而右之士は自殺いたし候追而土州より會津へ懸合に相成候處申譯無之會津之者兩人及切腹介措之上首尾見届土州士は引取候由

一水戸御連枝様去月之砌於京都御遠去に相成去る七日御葬式東山長樂寺へ御治棺丁度

祇園御祭中神幸道御通行に付社司より餘程相斷候得共聞入無之處御通棺之節社邊之道筋震動いたし御供之内落馬怪我等も有之大に恐怖いたし候由爰に奇なる因縁は右之導師二條新地見性寺相勤候留守に院主部



屋より火起り焼亡いたし候浪人狩之砌に右之寺は會津下宿旁專放火  
と唱候得其實は全自火之由に候事

一十日之比毘沙門堂坊官今小路大藏卿法眼と申人逢切害候由十八日夜に  
は一橋殿御付御用人平岡圓四郎學力あれとも  
姦智人と云と申人を何者共不知忍入致  
殺害候由時勢憂憤は必しも浪人而已とは不被存候

一十日之比歎曙茶屋邊長州浪人二三人參居を會津手開付四五百人押寄候  
處靈山に遁去夜中といひ澁谷越に懸四方取圍及吟味候得共終に不相知  
候由 (元治元年)

一二 因幡藩主征夷府へ建議之事

此度夷船長州は襲來致候に付は

皇國之御大事眼前に御座候間傍觀仕候議は難致右に付先達申上置候通

不奉待台命直に應援之人數差出候心得に御座候間此段申上候可相成儀  
に御座候は、應援之台命奉蒙度奉懇願候右襲來之儀は實以  
皇國之御大事に付隣國近國へも應援之儀可被仰出儀に奉存候鎖港攘夷之  
儀も御請被仰上候上は夫々御役方御差向に相成諸藩へ應援之指揮被仰付  
候は、攘夷之御趣意も相立征夷之御職任も被爲立候様奉存候何分  
皇國之地尺寸に而も相汚し候は千歲不朽之御國辱に御座候間不觀僭越  
之罪申上候宜敷御執成奉伏願候乍恐尙家來よりも申上候間御採用被爲下  
候様奉希候恐惶頓首

六月十六日差出

松平相模守

(關外記事)  
或曰方今國勢頽敗士氣衰弱して侯伯多幕の風旨を伺長援の議ある侯伯  
は纔に指を屈す甚きに至りては長援攘夷を主張する輩は禁錮幽囚せら



れ不測の罪に沈む者幾千人此時に當て因州公獨奮て不待台命長藩を援の議あり 公の明英言外に顯れ誠に威嘆に不堪のみ其れ 皇國の各藩は兄弟の如したとひ牆に聞けども外其侮を禦がざらんや

一三 長門忠士入江某等血誠奏言之事附諸藩京邸之留守

居へ廻帖及ひ因幡山部隼人廻帖之事

天下之禍變目睫に差迫候に付回天之猛斷を以捷伐膺懲之大典速に不被爲舉候は三千年來宇内に卓立たる 神州も髯虜被髮之域と相成可申は秦鏡を以照し見か如く不堪杞憂草莽蟻之微臣共非分を忘却不暇憚忌諱 石清水八幡祠前に參籠仕血誠を縷述し奉奏言候抑外夷之變起りしより日夜被爲惱

宸襟屢攘夷之儀被 仰出候處神奈川條約有司不取計よりして四五年之間妖氣怪氣天地鬱塞

叡念何時可被安歟と四海億兆悲噴悶惋罷在候壬戌年秋勅使御東下攘夷御督促至去夏於

玉膝下大樹公へ御直に御沙汰被爲遊期限布告被 仰付且 加茂 石清水

之 行幸被爲遊竟には大和國

行幸 伊勢神宮へ 御拜と迄被仰出愚夫愚婦に至迄感激踊躍敵愾之志を勵まぬ者は無之處豈計去八月十八日 闕下擾亂三條殿其外并主人宰相父子

勅勤を奉蒙常正月に至り兩度之

宸翰四月に至り關東へ一切御委任被 仰付素より征夷府へ御專任は可然候得共乍恐攘夷御督責天下に御先ち御率勵被爲遊候前日之 叡慮と齟齬



仕候御議には無之候哉千餘年來御確定之  
聖斷富嶽崩るゝとも湖水涸るゝとも御動搖可被爲在道理萬々有之間敷候  
併 九重深遠譏誣欺罔之不得止御事歟とも奉忍察胸膈寸裂痛哭之至奉存  
候譏誣欺罔之輩喋々口實と仕候處一通り著意之様相見候得共其實は因循  
姑息に陥り一日之安は百年之禍なるを顧ざる者に付聰明之聖察を以如燃  
犀御觀破不被遊而は實以御大事に關係可仕候礮銃艦艦船之巨大を誇張し  
奇拔淫汚を以希觀を艶稱奉惑亂一也不可欠日用之物貨を濫出し貧窮之益  
困窮をも辨なから無用之品を以有用之品に交易する杯奉惑亂二也夷域之  
廣大富張を行述し奉惑亂三也宇内之形勢を達觀し知彼伐謀は通商航海に  
あり攘夷は如逐蠅征夷ならては巢穴を毀事不相叶杯虛大之説を以奉惑亂  
四也敵の先聲に畏服し戰の勝を計較し奉惑亂五也身家之私計を謀らんか  
爲に萬世之利害を不顧目前之利害を巧説し奉惑亂六也如此因循脩飾之意  
を以醜夷之猖獗に壓倒せられ幾百年經候も實驗無之武備充實之説を以

奉惑亂七也恭惟

聖明英武夙に夷狄包藏之邪心を御觀破被爲遊候事に付今更乍恐御惑亂に  
可相成筈は萬々有之間敷元より器械之利鈍夷域之廣狹宇内之形勢且勝敗  
利害巨細詳悉武備彌増充不仕而は天津日嗣之知食

皇國にして君臣之義華夷之辨明哲相立 御國體に付先年來御必勝之御成  
算は被爲在間敷候得共大義之在所に

聖斷被爲在候御事に付戰之勝敗に御頓着は有之間敷元來 國家之榮辱は  
勝敗にあらず 國體之立と不立とに可有之況や武備充實は癸丑以來乳臭  
黃吻之兒も口實と仕候得共十年之久敷更に御驗不相見十年之後今日を見  
猶癸丑以來同様奉存候同様は猶可に候得共恐は夷狄之術中に陥り正氣消  
滅左衽之俗に變し可申は必然不然は壯夫烈士切齒堪兼四海鼎沸可仕は列  
炬を燃して見る如く不堪慨憤奉存候去八月三條殿始遽に御咎被 仰付候  
儀如何なる御深旨に候や不奉得伺候得共年來攘夷之淵衷御承順被成内は



皇室を補翼し外は醜夷を掃討し神州を富嶽之安に措んとの純忠至誠に被爲在候段誓天地奉哀訴候痛哉 紫閣丹墀之上に鞅掌拮据被爲在候縉紳之御方今日は邊陲僻遠之境に御憂慮被爲在澤殿は御脱走錦小路殿は御逝去元より攘夷御先鋒之御志願とは乍申

勅勘之御心情不堪想像實以血泣之至奉存候且於宰相父子も御不審中入京不被 仰付候段是又不奉得伺候得共父子先年來 官武之御間盡力仕東に馳西に聘於關東二百年來之廢典に相成候御上洛をも建白仕且在京中無勿體も

加茂 石清水之

行幸をも奉奏言殊に攘夷期限御布告後は日夜忘寢食勵精不懈尊攘之大義を闡藩布き士氣を鼓舞

叡慮遵奉台命承順之外他念無之儀は追々差出候上書并奉

勅始末に詳悉仕候畢竟十八日之擾亂三條殿始宰相父子之勅勘を奉蒙候儀

全大和國

行幸軍議可被遊との御事件より出來は不仕歟と奉恐察候當時之事件にあらず五大州之大寇を引受攘夷之大義斷然被 仰出期限御布告に相成候得共和戰開鎖議論紛々斯形勢に於

叡慮も貫徹仕らず

皇國之御武威海外に輝候杯は扱置内地紛亂も難測に付此上は乍恐玉體を御勞し被爲遊天下之士義御率勵被爲在候得は於關東も有司感奮台意も相貫列藩に於ても向方を知得可申國內一致之基本かゝる非常之聖斷ならては相立申間敷に付 石清水迄

鳳輦御進發攘夷御指揮被爲遊度責難きは臣子之大義且兼る

御親征之 思召被爲在候段奉伺居候に付無勿體も時機建言仕候儀に有之候處豈計

神斷意外に被爲在大和國



行幸 伊勢神宮御拜之 御沙汰被 仰出引續き十八日之擾亂に立至候次第に三條殿始宰相父子更に他念無之日夜眷々不堪戀 闕之至情罷在候然處三條殿始 宰相父子御不審之御廉も被爲在候得は乍恐玉座近く被召出心事巨細奉經

天聽候得は自然 宸疑可被爲霽御儀も有之候歟萬一淵衷に不被爲叶御儀も被爲在候節は幾應も

聖諭被 仰聞候得は如何計感激奮與益爲

皇國身骨を粉壺可仕實以非常之御涵容被 仰付回天之 神斷を以倒海之大寇御掃討被爲在度不堪千祈萬禱之至奉存候古今創業中興之事蹟を熟覽仕候に枕才横梁之勞坐薪嘗膽之苦無して成就仕候者は萬々有之間敷近時諸蠻夷之拓國廣地域は舊地を恢復し獨立不羈之國と相成候も盡皆劔槊相摩彈丸雨注之際に成就仕候者に世間航海者流之浮汎虛大之説を唱ふるの比にあらず牀辱枕席之際にては如何成神算勉籌有之共畫餅に屬し可申

成否得失猶此況や 國家之大難於大義片時も遷延被爲在間敷御事と奉存候然則速に 御國體を被爲建大義を以勝敗に關らす膺懲之御實驗關東へ御督責被爲遊且三條殿始 宰相父子赤心覆載之涵容被爲垂天下士氣御率勵之

聖斷被爲遊候得は四海億兆如何計歡喜踊躍可仕倒海之大寇御掃討非難所謂而行之鬼神避之と奉存候草莽微臣等誓 神明胃萬死奉冒瀆威嚴候石清水は昨年 行幸之靈地草木も皆翠華之餘光を奉被回顧彷徨不堪感慨之至誠恐誠惶再拜稽首敬白

元治元甲子六月 日

草莽微臣

濱 忠太郎眞木保臣

松野 三平久坂義助



野 唯 人○中村  
手敷 春三郎○寺島  
入江 九一

右之願書同文にして左之廻帖を副

私共僻在之微臣に而威嚴を不奉憚推參仕候儀誠に以恐多候得共宰相父子并三條殿以下從來攘夷之

叡慮一念に被致遵奉候處不圖も被蒙 勅勘爾後數月國方に而憂懼謹慎被罷在候模様如何にも臣子之身分痛苦悶惋之至に不堪此上は

聖慈皇天后土號泣愁訴仕候外有之間敷別紙一通書綴り候得共致入京候儀恐多候間閣老稻葉公に

天朝へ上達之儀願出置候猶又君候様方にも何卒三條殿以下宰相父子心事御洞察御手筋を以可然御執成被成下度則右書面寫差出候間宜敷様御取計可被下候尤多人敷罷出候得共頭立候者より十分鎮靜相加へ候間聊も疎敬

之儀は不仕候其段は無御懸念私共鄙情をも御愍憐被下御周旋之程各様より宜敷被 仰立可被下候謹言

六月 (元治元年)

濱 忠 太 郎○真木保臣  
入江 九一

加州様因州様仙臺様肥後様藤堂様久留米様桑名様御留守居様中以廻狀致啓上候然は長藩脱走之面々八幡迄罷登候由に而入江九一始より當方伏見屋敷迄今朝別紙差越申候に付御廻達申度則持廻り申付候尤長文に付御一覽濟早々使へ御渡し可被下候當方へ寫取御座候間被 仰下候得は猶御廻達可仕候急き此段得貴意候以上

六月廿六日 (元治元年)

因州 山 部 隼 人



一四 長門藩忠勇之士登伏之事情探索家書抄之事

一右之通に惣人數七百人計着伏夫より天王山嵯峨天龍寺杯所々へ陳取伏見迄は白赤之旗を左右に立槍隊四十人銃隊三十人位宛に福原越後總帥に押候由着伏之節は旗は舟に入る、其外跡先へ段々大炮小炮并薙包杯餘計に持はこふ前後着伏千人計と云大方鎖り帷子を着込にいたし或は甲を被り候者も有之三柄御番所御改之節は福原越後家來と答申候何用向に通行被致候哉懸合に相成候處歎願之儀と申候其時林肥後守殿被申候は平常之通行と相變り怪異之形裝

天朝を不憚に似候間御通行に相成候は、平穩之形裝に御出立可然と存候併京都表御沙汰迄之處は御差停申候段被申候得は御尤に奉存候併國

許之儀は亂國同様にも平常之形裝に御座候間此先に異形とも心得不申と答申候只今之處には進退出來不申候様模様候得共根元より滯伏之心組之由

一昨日は山崎邊 野陳之積にも候歟夜に入寶寺及近傍借受三四百人陳取兵糧松明等船貳艘用意大釜杯餘計に持越候由昨日著之内隊長らしき馬上三四騎相見候今晝三十石船二艘宿伏之處數揃之槍二包并小銃六十本計も入候様之箱二荷七島薙包荷數二積參り京橋長藩下宿へ取入る、同時十人二十人位宛凡三四百人位着伏いたす六月廿三日也今曉七時比鼠渡りを越へ山崎より西海道を急候者胴服着いたし三四人有之候牧方往還に具足箱三十五荷大炮二火藥箱共思敷者見受申候白地に長藩金剛隊と書し旗有之候今朝大炮二門旗千數本長藩屋敷へ取入る、今朝宮津公京都に御伺に相成候處平常之行裝に疎暴等無之候は、相通し不苦候得共若從軍之行裝に暴亂等有之候は、差押可申との御沙汰之由嵯







部茂木兩所へ御引分も出來兼御困之由に而 此方様へ援兵の儀御内意に相成候得とも當時詰込人數至る少く殊に援兵之儀は不容易儀に付一先御國詞之上ならては六ヶ敷との御返答に相成申候其餘土屋采女正様御城下杯は浪士大炮押懸其末放火に及び人民難儀は申迄も無之彼方角不怪騒々敷江戸中へも大分浪人入込日々一兩人宛は被召捕其中には女之浪人も居申候處其女馬乘袴割羽織鮫鞘之大小をさし鈴木政之進とか申候乍女手下三百人計も有之此者駕訴いたし候其後水戸様御屋敷に引取に相成候右女は八丁堀同心之妻之由尤駕訴之主意は何たる事歟一切相分不申何様珍ら敷事共に御座候此外浪士一條種々取沙汰御座候得共數多之事にて筆紙難盡候云々略六月廿五日已下別書に在し横濱鎖港大和守様御委任にて御老中方御相談之處都御不同意に付大和守様不怪御論說被成候得共不相立一旦閣老若年寄衆引入之處又御出方之由然處蘭佛兩國申立候には最早此場に至迎も戰爭之上 日本勝利を得候は、鎖

港可致若兩國勝利を得候は、開國可致尤攝海へ軍艦差向及應接候は、速に相濟候得共京都に近き所柄其上不慮之備立も無之所にて及戰爭候は、無罪之人民を害候事羅歐巴にをいては無之古法に付彼表には乗入不申横濱にて血戦いたし可申段申立候由面白き事也

一 中山侍從様長州には被居不申水戸家之人數に入込に相成候趣に相聞候尤長藩士七八人宛附添居候由

一 去年切腹被 仰付候永井雅樂に續き候同志之面々は遠島に被處候由遠島向より坪井九右衛門と申者國政筋建白いたし候處暴論家より異說申立打首に被 仰付候由

一 松平大和守様總裁職御免

一 板倉周防守様總裁職

一 阿部豊後守様御老中

一 東國一揆筑波山は退散野州太平山に楯籠人數貳千も有之由相唱諸家様



土屋様初十三ヶ所へ討手被 仰付候由

一六 長門藩福原越後列舉動大坂にて見聞書之事

一 今度長州家老福原越後人數引連罷登候儀は江戸より召に而出府仕候と唱へ去る廿一日より昨日まで着坂仕候總人數九百人之由に御座候尤福原は昨夕着坂いたし同勢百人計皆拔身之槍相携長州屋敷へ入込申候間昨夜罷登候由

一 昨廿三日長州人數陸路船路と引分れ罷登銘々着込致着用又禱拔身之槍持參腰兵糧に而夕方三拾石拾艘計乗組罷登候を見受申候

一 長州屋敷定府之面々至急に國元へ罷下候様被 仰付其跡には多人數入替り詰込候由

一 西宮より上陸いたし山崎越罷登候者多人數有之候得共人數之多少は相

分不申候

一 昨廿三日乗馬數十疋長州屋敷へ引入候を見受申候

一 同日晝後番頭體之者二人馬上筒袖又は着込鉢等着用いたし鐵炮玉目三十目位より拾夕位迄其外小銃并鐵棒相携銘々相印名前等記し三百人程陸路行裝に而押出候と相見申候

一 此節罷登候者は十七歳より廿五歳まで撰人之由尤小者體之者一人も見受不申皆致帶刀荷物之儀は至而少く有之様子見受申候處にては江戸へ罷登候儀とは何分相見不申候

一 大炮數拾挺飛船下積にいたし參去る廿一日之夜屋敷へ運入候處昨夜淀船にて積登し尤小銃は數百挺箱入にいたし其外相携候者數百人見受申候

一 徳山候も不遠内御登有之由本藩よりも追々に罷登候筈に有之由承申候右之通聞取申候



六月廿四日附京都之風聞

- 一因州より本國寺へ近日多人數罷登居殿様にも追々御登共唱候
- 一備前様當春御登に無程御歸國之處猶御登とも唱候

一七 長門藩人等登伏京都動靜之事

- 一長州人登坂別紙大坂見之通に候處本月廿三日夜半右之様子且五百人計も牧方止宿之由會賊より知せて御役所并御留守居方等夜詰有之翌廿四日早天より津田方初皆々寺町御門出張大混雜いたし諸家様には伏見山崎を初め洛之口々御人數御堅伏見内には入れ込せ無之筈に長門之荷船迄も留め被置候由之處同日晝長人四人歟馬上に乘付候を彦根手より押へ候得共急用之由申切罷通り跡之大勢も遂に同所へ入込相滞居

廿七日には手を分山崎室町へ引移り天龍寺にも多人數參居候由に相聞候處廿七日京師流言いたし候には長州人數押參内可致旨申出候由會賊より寺町御門へも知せ之由又間には二三百人計一橋様へ歎願有之押懸候杯と申觸し或は竹田街道にては堅め之人數と既に取合に及候杯とも相唱へ諸家之御人數多くは甲冑大炮旗圓居押立東西に馳違ひ大に騒動いたし候寺町へも御備手惣驅付程に跡は南禪寺惣門中門とも在御家人より相堅め後鉢卷に大炮を並へ挑燈晝の如く仰山なる事に勿論御役所を初局々皆夜詰に有之候得共加賀筑前は格別仰山なる事は無之由

一右に付南禪寺より七條邊にも堅め之御人數被差出候との儀差起り御物頭引廻にて御家人罷出寺町御門番所へ立寄同所より多人數誘立出張之筈に候處御國御人數之内は他所にはめ艸には決不申趣同所詰御物頭より説有之皆々此説同意に議論に相成候に付出張は不被行尤御家人は十七人歟七條下手迄罷越候由に候得共素より何事も無之追引取



候由但此前伏見御堅めをも可被 仰付哉との御模様にも左様無之様段々心配中也御留守居探索杯より起り候事之由京中は狸に被誑たる心地也

一廿八日因州御留守居より加賀薩州仙臺久留米勢州并桑名御留居杯集會之廻文來候に付此元よりは安岡名代にて罷出候處長州人より之願書各藩へ寫を以何卒一統願之趣周旋に相成度段頼談有之候由右願之大趣意は攘夷之

叡慮を推立當時迄之行並徵を舉詳に書顯且皇國之利害を論し何卒速に膺懲之御決斷に相成度との趣扱又三條様御烈并宰相様御父子

勅勘御免に相成候様との二ヶ條閣老稻葉長門守様へ御周旋被下度との儀濱忠三郎松野三平野唯人牛敷春三郎入江九一福原名無之五人にも添書をも相添尤京中は入込不申様御沙汰に付入京は不仕人數騒立不申様取鎮置候由然に長州脱走之者多人數八幡籠居候との儀も相見候様に覺候此

書付長文中々急に寫出來兼候因州御屋敷にも右御留守寄合之席中誰よりそ申出候哉



探襍錄卷十七

一 長藩士登伏以後京師動靜風說書群載之事

一 長州追々に登込御家老國司信濃山崎へ參居跡も益田彈正抔引續登り候との風聞

一 加賀荷物不斷登り中納言様にも近日御登之御模様尤因劬列御相談之由極密事 會藩彦根抔

一 鳳輦を關東へ奉動候との姦謀有之候を因劬には證據を取居候由又一説には長州より去秋之仕返し之ために右之唱いたし候得共一躰近來會藩は大に被惡之由

一 昨日有栖川宮様初傳奏議奏其餘之御方々御參 内無之由有栖川様は水戸因劬より守衛之由



一桑名様所司代御斷御内意之由  
 一備前様杯にも御上京とも申候  
 一會津様には今に御花畑御滞之由但 御所より御察討二ヶ條有之候とも申候  
 一八幡杯にて之祈禱は歎願成就而已歎不安意  
 一九門内兼御堅被 仰付置候御家之外は加賀を初非常之節  
 禁闕御守衛申上度との御書達に相成且外に三稜歎言上有之候由に候得共未た寫手に入不申候加賀藝芻因芻備前阿波對芻津山杯同意之由其外は宛と承届不申候以上 七月十一日右一〇元治元年  
 一昨日晝後騒ケ敷相成夜前より今朝に懸諸大名追々御出陣に相成只今下立賣烏丸邊にて打合有之彼地死人も多有之様子全く長芻より中川宮へ押寄候儀と奉存候只今共火之見より一覽仕候處同所大炮小炮夥敷相見候嵯峨天龍寺へ打手として一番手薩州二番一橋小田原三番松山膳所四

番青山鯖江右之通追々繰出に相成存外之大變只今河原三條より出火大火勢に御座候以上 七月廿日右一書  
 一十九日朝より三條河原上處より大炮小砲火勢十三ヶ所に相成北は一條南は五條通西は堀川東は川端迄焼失いたし居火未鎮不申諸家様御在京中故大混雜にて御座候

一總督御本陣イ 松平肥後守人數イ  
 一監軍 一人  
 一奇兵 國君御名有馬中務大輔

右之通可被心得候

一先手伏見打手配イ

一同二

一二之先見イ

但方面之諸軍を令司進退イニ無を主るへし

戸田采女正

但人數計イ

井伊掃部頭

松平肥後守同越中守前イ



一 監軍イニ無

一人

一 遊軍

有馬遠江守小笠原大膳大夫

一 右一之先天龍寺討イ

松平修理大夫

一 右二之先

本田主膳正

一 右二之一イニ

松平越中守前イ

但右軍を統イに無

一 右二

大久保加賀守

一 左二

松平隱岐守

但左軍を統

一 遊兵軍イ

青山因幡守

一 締備

松平筑前守

但三條邊洛外へ押出臨機應援

一 監軍

一人右七月廿日仕出右一書

一 京地何歟一向取留不申候得共大變之様子大邊水戸長州人數より燒拂候由

一 淀城へ夜着天王山々崎長劔勢三萬餘人にて押入候由天王山より篠明松にて火續大混雜此許御城外は夜前より俄に御備大筒并甲冑牽片付逸不殘其儘にて立退市中大混雜早馬にて通行多餘は御堅察可被下候以上右大坂より小倉表定宿屋へ注進之趣小倉表役筋に可被達候右一書  
當月十九日朝長劔藩士より越前固め境町御門會固め蛤御門右兩所に攻來四時分追及戰爭候兩處共相敗入れは入らるゝ處に如何思ひけん操引に仕候は全井伊薩之加勢有事を察知と奉存候  
一 越前は大敗軍之由是は水府之人數を見て長藩と思ひ同士打仕候由愚案水藩は恐らく心ある歟

一 備前因易如何に有之候哉何之風説も不仕候  
一 此方様御堅めはとう／＼手合無之候然共柴尾某と申者流玉に當り命は



難計由

一長藩打死見物仕候處三四十人も有之候其内蛤御門に高木元右衛門と見受申候討死仕居候其外肥後武士は討死見受不申生捕候内には如何哉と奉存候未相分不申候但高木は志を遂羨敷事に御座候其外委細申上度候得共御固場所にて認得不申云々 七月廿二日仕出書<sup>右一</sup>  
扱今拂曉より洛中大變之次第は先頃より粗録上仕候長藩人所々屯集之者共引拂一件より差起り去る十六日大小御目付伏見へ參向福原へ一刻も人數引拂候様委細御説得に相成候處承知仕候段御請申上併今一日御猶豫奉願候處其通御聞入に相成候得共會桑兩藩より一日も被差延候儀は御宜しかる間敷是非引拂候様御申聞若違背の筋も有之候は、御所置可有之段御申聞せに相成度申入候由之處其通福原へも申聞に相成候處一通り承知いたし候得共其夜伏見勢等天龍寺勢等一に相成昨夜伏見街道藤森御固場戸田采女正請持場迄押登候處同所にて差控早速取合相始

長人即死四人有之炮發に辟易いたし不殘元之通伏見長屋敷へ引込候由一今朝六比より嵯峨天龍寺方に當り炮聲頻に轟候に付南禪院之鐘樓に登見申候處  
御所と二條之間に當り西山麓二里計之處炮聲相響烟も見へ餘程打合候様に見受申候

一五ツ比より

禁門に迫り炮聲相響堺町御門にて<sup>福井固</sup>大戰争長刃人鷹司様へ潜伏物蔭より銃炮打候に付御固は働出來兼候由にて薩會桑彦より右御同邸へ破裂彈を打懸候に付直様燒上<sup>四時</sup>分也 黒煙天を焦し果て長刃人多人數逃去候に付打取生取餘計に有之其内白鐵砲肌着に用候者百人計北手に逃行いつ方へ潜伏いたし候哉未相分不申候最中探索に相成申候九門内燒失は右鷹司様九條様にて一旦御花畑之方に吹懸居候得共俄に東北之風に替り



御所は無御恙夕剋頻に南寺町筋へ廣かり居申候

一此方様大將軍督志水新之丞組共拂曉に出張津田三十郎病中なり組計五過に

出張何れも甲冑杯見事にて天カ大授菴前勢揃同所より道押にてふゑん出

張吏人も奮發いたし候事に御座候寺町は原書ノテ賊襲不申先は御仕合にて尤流

矢にて芝山文左衛門外様頼より咽懸打通其外御番所上瓦と御門扉へ當

候音無絶間爲有之由之事

一今朝 此方様重役之内一人即剋 御所へ罷出候様大目付様より一橋公

之命を受御達有之候敷殿直に出張之筈に候處何分寺町迄出張人込にて

被出来兼候に付寺町詰御番頭志水殿被罷出候處長藩人多人數暴舉に付

早々討取候様一橋公へ 勅諭有之候に付列藩へも其段御直に被仰渡筈

之段御申渡に相成候事但夕七比なり

一三條通邊所々出火長州屋敷は焼拂且又承候得は伏見之長屋敷も同様之

由一説には桑名より焼拂候段も風聞に御坐候

賊とは社嵐  
にこそあり  
けれ

癸亥八月十  
八日後の勅  
と云もの條  
と云なき事大  
むねなき事大  
ことし

一加州世子は夕七比此元御發途歸郷之由にて御同勢も大分有之たる由今

日柄如何哉一紗甚懸念之事に御座候但只今承候得は何敷  
御立腹之事差起候由

一加州右之通候處只今六中比也 同藩御人數夥敷清和院御門より入込候段馬淵

次郎八寺町より参り噂御座候左候得は右之噂とは齟齬いたし明日迄に

は事實相分り可申候

一洛中老若男女銘々夜具其餘手道具等所持いたし南禪寺其外山付之方に

逃行昔物語現に見申事にて中々可憐次第御座候

一火事も只今五中比 大分鎮火に趣三條橋より餘程下迄焼申候

一長州人討取之首數先是迄承り候分は大略七十計其餘猛火にて焼死生捕

等夥敷由薩より生捕八人首二十五桑より首七彦根は六人にて首五ッ歟

提参り候由餘程戦争にて御座候委敷儀は未承兼其上砲聲相轟候中にて

執筆杯は氣も移り不申候其故別て早卒御海量奉願候云々巳下以上 七

月十九日 簀田丈之助



猶々藤助儀も不相替段宿元に御申聞可被下候今晚より出勤今晚徹夜と相見初陣別ゐなへ申候去る十五日にも御所より一紗に暑氣拂一貼宛被爲頂戴冥加至極難有仕合奉存候事に御座候以上右一紙

長岡良之助

或曰所々放火の事長州の仕事とする恐くは野々宮家の私言と云へし

伏見其外へ屯集之長州人 御所近邊に押寄亂妨に及所々放火いたし不容易形勢に付早々上京候様可致候七月十九日右之御書付傳奏野々宮中納言様より御渡に相成候事右一紙

上略云々福原越後一手も今以滯留いたし跡勢追々國元より操出居候趣にて夫等之催促歎日々飛脚立申候由いまた着坂之模様は無御座候

一八幡之儀は先月廿六日より參居同所城之内町綿屋清助と申町人へ長藩より俄に用達を相頼此者之手引にて瀧の坊納所きた坊へ二夜三日之祈禱を頼込候處相對之儀は一切相斷申候段返答有之從長藩之宿坊中之坊無住に付兼帶之松本坊へ猶又頼出祈禱致候由同藩之内五六人宛右之間

は參籠と唱登山二三日越には三十人計宛山崎より交代いたし町家借受分之内に止宿罷在候由尤參籠之節は籠進潔齋毎日々朝晝腰兵糧にて參籠致居候但參籠且御祈禱之趣は今度一紗歎願致居候書付  
天朝に無滯相達候て速に願望成就之段祈念頼込候由八幡下町之寺院十ニヶ寺借受有之町家五軒表札は長藩下宿山住之坊七八ヶ寺惣て出張所之表札認人數は參居不申登山交代迄參居候趣  
一橋本にて米千石程漬物二百樽計急に入用之由にて買込方手配居候由昨五日之夜五時分に米三百石漬物十樽程相調同濱より山崎積送候由  
一八幡參居候者共晝夜無油斷着込槍持參借受之場所宿之打廻嚴重之事に御座候

一會藩より模様見繕と相見町人躰に身を崩一人八幡へ入込居候處長藩より見出し捕可申と手配之處逃去手に入不申同藩不輕殘念之趣に御座候由 右去五日之夜八幡へ參り承合候事



一長藩人數追々操出居此元福原列より催促飛脚毎日々々相立候に付最早着坂とも山崎兩方へ罷越居候とも相唱一向伏見表へは參り不申去八日朝船三十石船二艘士七八人諸道具も無之長藩屋敷へ參り其外（續くカ）

一〇空船迄登來一圓様子相分不申候に付猶又昨日之朝より橋本より枚方へ參り承合候處いまた着坂之儀は無之模様兵庫にて滿船之儀は見受申候と西宮より參候者咄之由山崎越にも懸申候哉格別取しめ候尊無之候

一八幡下宿々々等は前段同様之處壹貳寺は御所より之故障之趣にて斷相濟申候由下宿付は社務より廣橋迄昨八日相屆爲申由

一二夜三日之祈念は中坊と申候八幡にては三條と相唱是は六月廿七日より初申候

一七月朔日より猶又善法寺と申候當法寺は權僧正之由當時は幼年に付中之坊を頼祈念之手配致候趣右に付ては加納新太郎梨木實之進と申候社司坊中見しめとして附添居申候參籠之定人數は松宮相良渡邊何某兩番人

願之列大將と相見人數都合拾四人御座候晝夜不寢番其内より本社へ參籠是拾四人は一昨日廣橋家迄屆相濟申候との趣祈念は前段之通に候

一去五日朝俄山崎より參り當日爲試貝太鼓吹立貝は曲吹と申唱奉納仕度申入候然處八幡は定法に山上事有之式貝又鐘なとつき申候事に付山下驚き騒動に及可申候間見合可申と社務より申聞候得共其日は相止猶又六日懸合來

御所へ相伺吳候様申聞山上之三方へ五六十人引連吹立申候用意之處如何之咄合歟猶又延引に及居候但是は四方へ内々人を出し置貝等之聲何丁聞え申候哉心見之由に候

六日に山下橋本邊村々へ御觸左之通

今度當宮へ致參籠居候長劔藩中本ノマ之内明七日朝五時より八時迄之内貝曲吹寺納致度段申出候右は去朔日にも申渡置候非常登山之相圖と心得違無之様急と可申通候事



七月六日

社務代

片岡阿波守

右夕方より延引觸有之候由

一山崎之方は八幡前に中長刃之御紋幕左横手は阿波之御紋幕右手は土刃之御紋相見申候

一天王山上に當時百人計長刃様之御紋付幕尤山上三間に七間之假屋二軒昨八日迄出来

一明智城跡にも百人計幕紋同様

一寶寺觀音寺其外近邊町家百家下宿尤寶寺觀音寺境内には六疊敷七八疊敷之假屋拾軒程出来之由いまた人數千には滿申間敷との由尤焼出しにて當時八崎本ノテゴイ川保と申候所之質屋渡世之百姓ソバトウと申者より焼出し凡七百人程之手配と承申候

一米わらし貳千足竹皮貳拾貫目近日最中用意之由

一觀音寺下陣大將分にて士は先々月初迄山崎宿之旅籠屋渡世高槻屋清兵衛宅數日滞留搦物杯買追々八幡近村橋本邊へ參り不輕直段下直に付知音も出来いたし居候此節觀音寺下陣出来之上高槻屋へ止宿之札を同所之老母へ申入候由所々右等之業いたし入込居申候と相見申候

一前條長藩八幡山上に居候拾四人は魚肉一切不相用平日握飯迄用申候焚出しは綿屋清助終日同人手代相詰居申候由

一山崎近村へ長藩之觸下宿へ筒音いたし候は、直様立除候様兼て住居々々之家本ノテ下陣迄差出置候様且又諸道具は一剋も取片付置知音々々へ預置家圖差出候は、萬一之節は長藩より跡家建方等は取計遣可申との趣一長藩より宇治之寺院借受方内望之由尤伏見も追々見物として罷越居候

事

一昨今當所福原列之下宿三四ヶ所も名前取除人數居不申山崎八幡は昨八



日夕迄は人數相増不申候間<sup>不分</sup> 光明寺又は天龍寺へも引取候哉頓と分兼  
候得共先三四軒は下宿札并名前も昨八日朝より取除申候事 但福原は  
是迄之通罷在候

一八幡へ罷在候面々よりは淀様御事は願書差出候砌之御噂杯を拜聞不輕  
歎居候由

一藤堂家より淀出口御堅之處御人數は參居候得共堅め之番所も無之町家  
へ伊州下陣と相認候表札を打止宿迄いたし居候

一今朝肥後屋へ着之面々より昨日長藩乗組之飛船三艘着坂之咄承申候處  
昨日大坂より早打籠貳挺長州屋敷へ着仕候由右着船之左右と存候事  
右昨八日橋本枚方々角にて承知仕候

右之通にて外々相替之儀も無御座候云々以上 七月九日伊兵衛<sup>右一紙</sup>  
<sup>略上</sup>去月廿日着にて廿六日暮六時分御受持場寺町御門御人數被指出翌廿  
七日歸宿出來不申段々噂承候得は長藩廿三日四日に着坂仕候て枚方止

宿押登候由自然其儘入洛仕候も難計由にて其夜早速伏見入口には平日  
織田家へ堅被仰付置候處大垣戸田家御人數京詰限り出張竹田道は會津  
出張其手前壬生浪人共相固大宮通鳥羽へは小身之大名東寺に大陣を居  
候て四隊に出張三處共晝夜甲冑着詰にて槍劔拔身廿七日夕寺町之間を  
得候て伏見迄獨行仕候處三所共右之通長藩は丁度小生伏水へ參候時同  
處着之模様惣人數五百も船乗場へ居申候同夜七時分又々騒々敷相成于  
今も入洛參 内も仕哉に風聞翌日迄鎮靜不仕候廿八日夕七時過貝太鼓  
之音聞候間彌以入洛と思候て何れも寺町へ出張惣人數甲冑仕候位にて  
物見杯之往來は誠に櫛之齒を引かことし同夜五時分彌以長人鳥羽道よ  
り四塚へ押通夫より桂川堤上押候て嵯峨天龍寺取入申候段物見より届  
申候四塚堅は右長藩押通候節は同所引拂申候右竹田道は鳥羽道と其間  
七八丁會津より押留申候は、大變に可相成先は無事に天龍寺迄は押行  
申候長藩惣勢は山崎天王寺へ屯陣仕候山崎へは廿九日内々參候て見申



候處中々橋本より先には被行不申天龍寺には同道にて參申候處ちと都合惡敷長藩出會仕候て歸路甚難儀仕候得共幸に無事に引取申候天龍寺之方は其後は六ヶ敷當時は一切他藩よりは天龍寺近邊にも寄付出來不申候膳所藩杯參り散々之躰に相成申候由翌日承申候近日又々將軍家上洛之風聞仕候彦根久留米は餘程登込申候薩も一昨夜九時分切火繩にて大勢入洛仕候越前當君上京途中引返に相成候由尤御先立は着京仕候大垣侯も途中より同様會津は廿六日夜より參 内今以歸陣無御座内々市中之評判には切腹とも承候去十三日信州松代佐久間修理被切殺交易西唱彦根會津中川宮へ取入云々との事に御座候申候三條に張出御座候今朝も二條河原にて辻切尤長刀之侍にて未何人とも相分不申候惣躰市中之評判會津は言語同斷只々長州而已評判宜敷薩も散々惡敷右廿六日後は會津大垣松山彦根杯所々出口を相堅居候分は甲冑着詰にて末は如何相成可申哉云々已下略

七月十六日 (元治元年)

田上城 助右一紙

七月十八日夜丑剋下り山崎伏見邊之長州人伏見本海道に押寄候由承申候に付直様馳出見分に參候處騎馬武者多御座候て大に騒ヶ敷段々先へ參稻荷二三丁手前有馬遠江守固場にて先々之様子相尋申候處藤森戸田采女正御堅にて長州人無理京海道押寄申候に付大砲二三發相放候處即死四人怪我人も少々御座候由夫々辟易仕直様引取申候由有馬内三好源藏と申者より承申候右之様子に付本海道は安心に見申候私儀は此所より引返申候處もはや曉卯之剋に相成皆休息罷在候處 御所近邊炮聲所々嚴敷相聞且又河原町長州内上下より火烟燃上り申候に付又々馳出申候右屋敷へ參申候處右出入之者之由にて三四十人にて外廻り火鎮居申候且又右之人申候事には決て他家へは火移不申候様可致候間騒ヶ敷不仕様觸廻し申候夫より堺町通に出申候處長州人取合に相見申候炮聲不



絶右同通竹屋町東へ入處にて番衛人と見候一人切殺され同西へ入所にて同様之人一人即死有之町通にて三人即死内一人所司代之印二人は分兼申候夫より竹屋町烏丸へ罷出申候處下立賣御門前にて三人切殺され内二人會津印夫よりさき蛤御門前へ參候處會津人數大勢固居申候處より見申候處三人打伏居候者有之死人と見受申候夫より室町中立賣邊廻り申候處此處嚴敷砲聲仕上より薩人數參り其内之人足私知人にて候間先剋より之取合相尋申候處只今は迄逃參り中立賣御門外は七八人も即死致居候由其外蛤御門に死骸七八御座候と申候惣躰今曉戰爭之初りは七ッ比下り下立賣又は堺町御門より初り申候由丸田町西より參候長州人堺町御門越前御固に仕懸鐵炮三十挺計打込大に戰爭仕候由にて右固前に死人餘程御座候由聞取申候其後燒討九條様内より燒初只今東は寺町西高倉南夷川通迄燒失仕尙々火勢盛に御座候鎮候者一人も無御座候長州屋敷外へは火出不申跡藏九ヶ所殘居申候加州様御人數大勢白

川橋を越候に付相尋申候處何歟御様子有之御歸國に相成申候由承申候此段御達申上候以上

七月十九日未剋 (元治元年)

中村英次郎

右一紙

甲子七月十九日辰之下剋長劔屋敷燒同巳之下剋鷹司様御屋敷より燒始公家衆之分

鷹司様 難波様 西洞院様西手 東久世様 唐橋様 藤井様 外山様  
 三條西様 正親町三條様 四條様 久世様 壬生官務様 北小路様  
 西大路様 岩倉様 慈光寺様 裏松様  
 同武家衆屋敷之分  
 久留米 水戸 阿波 津和野 福島 丸龜 肥前 因劔 安藝 雲劔



水口 薩州 大垣 松山 姫路 笹山 越前 秋田 越前大野 川越  
 津 小倉 弘前 長州 備中松山 丹波園部 丹波龜山 米澤 尾張  
 宇土 忍 紀伊  
 同社寺院之分

錦天神 妙滿寺 本能寺 天性寺 矢田寺 誓願寺大久保加賀守旅館 西光寺  
 蛸薬師 倒蓮院 禪長寺 了連寺 佛光寺 真田信濃守旅館 本覺寺真田下陣  
 東本願寺 枳穀屋敷 六角堂 因幡薬師  
 右之外小社小寺四拾軒程も焼失仕候事  
 右一紙

略上云々爰許之様子は追々申上候通にて此節溝口殿一隊上京も残念成事にて間に合不申候然處小倉應援被爲蒙仰候に付御人數は大坂迄参り京都へは登り不申直に小倉之様に廻り申筈之由に御座候筑前も同様應援

被 仰付候寺町御門之方は御とき放御願に相成申候得共是は御免不被爲仰出候に付此節登込居申候地筒百五拾御門御固に相成御郡代一人惣帥にて居申其内に私共より十人二十人宛預申候仕組に相成居申候由何様此節は爲御名代 兩公子之内御出馬之由嘸々動搖と奉遠察候中々不容易事にて御座候

一長州世子長門守様御國元去る十三日立にて御上京に相成居申候處備後之輛迄御出に相成申候處敗卒追々馳集右之御注進申上候に付此處にて暫議論有之此儘直に押登と申説も有之又自國を固と申説も有之候得共道中之御固堅固に有之候間迎も打かたしと申説に落著輛より御引返に相成申候既に兵庫迄は御出先觸とも参り申候由兵庫迄は御出に相成申候と申説も御座候得共得と聞繕申候へは是は全く虚説なり此節は吉川監物も御供にて上京いたし申候處變動承り一人世子之御跡に残り福山阿部主計頭様へ歎願致候由薄々承申候へは今度家老福原越後初對



吉川歎願の  
風説あれど  
も皆探家  
のたがみ出  
にたる虚言  
恐らくは虚  
と言へし

筆書能々思  
ても感憂中  
心にして争  
憤する事な  
か何の辨も  
無く死の心  
地に角せし  
や免れは必  
死の地には  
附けずは誠  
臨まぬ事な  
出ぬ事な  
津の毒酒を  
酔すも

禁闕不届至極之振捌におよひ實に主人身上迄不相濟儀候成行恐入たる  
次第に御座候何卒平日之御好を被爲持本領は安堵仕候様御執成被下候  
様奉希候と殊勝に歎願いたし申候由吉川は最初より福原益田とは違論  
にて御座候得共此節は激烈之意強くとふ、此埒に相成申候由是は眞  
情つまらぬ事と存居候人に相違は無之由に御座候此節會津より召捕候  
金剛隊之内段々吟味仕候處有様ケ様成事とは存不申益田福原との、供  
いたし參申候最初私共へ之申付は江戸へ君公より之御歎願有之候間拙  
者持參いたし申候間路次心遣に候間乍苦心警衛いたし吳候様との沙汰  
にて御座候處伏見に參申候處京都に歎願と申觸に相成いか様なる事共  
不存指揮を受何之辨もなく是迄踏込申候間命御助被下候は、長州御征  
伐も御座候節道案内罷越可申候と申候由此者申出にも吉川殿は違論に  
て出立前大議論有之たる由しかし益田との方之説か強く一致に至申候  
間此節ケ様々々に相成申たる事にて宰相殿御父子も昨年より萩之方は

とちと本心  
にさめよ  
又捕れし  
が道案内  
絶てなき  
と可なり  
に問はる  
可なり  
初にケ様  
成事とは  
不申とも  
事共何存  
揮を受何  
辨もな出  
前大議論  
申々相成  
て云々事  
は見えな  
は前後多  
はし何筆  
従つてに  
は書つて  
かすしぞ  
いづれ

御立除にて山口に御引移に相成申候由此所も中々要害にて今度立前に  
も石垣共丈夫に出来申候由申出之趣に御座候將亦此節世子御出馬も内  
輪紛々之議論有之成程主人之勘氣を臣下之身として忍兼歎願と申は一  
通り之理は相聞申候得共 勅勘之身として其身嘆願とは何分條理立兼  
天下之聞もおしく有之候間御出馬之處は御見合當然と申論も有之たる  
由に候得共不得止君侯は御出馬に相成申候由彌以國中も議論紛々にて  
此節は一致に至申間敷と奉存候先達て天龍寺より打入申候時分も其夜  
に至り議論差起り何分御所に押寄と申は、藤森天山が詩に晋甲除姦更難とあるが、この事ぞ天山が此詩は  
大塔宮の御事を味じたるか古今除姦の易からざる事よく、思ひ合すへしあなかし、  
の一は残り居申候由左も有へき事に御座候  
實は誰かさしとむる事ぞ可恐察、あなかし、  
昨日御參 内御差留に相成候宮公卿方是は後日如何被 仰付候哉此内  
書散したるは誠に臣子の苟も不忍とこそまに北條足利の逆謀を讀んとするに似たりあなかし、あなかし、かも  
には敷革之上に引出され候御方も可有之と被存候  
有栖川宮御父子 鷹司殿御父子 日野大納言 殿とか卿とか書ざるは  
不敬無禮と云べし已下倣之 中山大納言 岩倉三位 石山少將父子



戊午姦賊井伊が逆謀に超過する事萬々

賊とは豈會津を云乎

五辻三位 平松三位 勸修寺侍從 醍醐中納言 西大路少將 正親町大納言大炊御門大納言 橋本少將 右之通去る廿七日御差止

右之次第に有之候間彌以御所向は堅固かゝる正義の下つ岩根の公卿方押能奉て大宮柱争てか堅固なる事を得ん筆者何そかくは目のくらみたるに相成申候由此際に相成候ては只今迄色々之異論も有之候ケ所々々も惣て一途に相成候も是非曲直辨

明にて此上は天下一紗罪をならして討之の賊に相成申候

一因易侯非曲直は今日眼前に定る事にあらず蘇我が逆謀守屋の忠誠道鏡そ罪廣繼清丸の忠憤義烈等の明辨は千載朝典の上杯御眞情を一橋公迄御嘆に相成申候由其趣には決して長州へ御左祖と申譯には無御座候得共暴激之徒に被要何分御心底に不被任段御申

越に相成候右御書も暴激に被爲思手水場にて御認に相成候由に御座候

(網外)此一條の論などはあまり愚にして實に不堪笑今日必しも辨せず小人

の心を以て君子の腹をはかるといひながらあまりあさましきことな

らすや探索の不精大むね此類としるへし

一所々御固 山崎固戸田 郡山被免大久保 大幡宮津 小濱 伏見豊後 橋市橋控置小出控置 大坂紀高松但御暇井伊土芴堺紀芴但岸和田と應援西

宮藤堂但尼崎と應援酒井 兵庫明石 薩州

一持口定 七口但只今被仰付置候通にて嚴重に可相守候

老ケ坂は 龜山 青山は鷹ヶ峰へ可出張なり

右之通被仰付候

一中略今暫は相滞り京地之成行も見申度御座候無事之段迄申上度云々右等の蒙昧の見果して何の用に供せんとする只國家の財用を費

之七月廿九日夜四比認 御尊父様探案家の由嘉左衛門原書の註に近比八代在より引尙々中略語曰士として居を懐ふは以て士とするにたらず然るを眼前一時の偷安を太平と思ひ故郷に錦衣を飾らんとするの本意か 不堪笑想

右一紙

(原朱書) 京師大變聞とも大概諸説不同にて一定不致候

七月十九日夜明前長芴御家老福原越後伏見表より東街道を道押にて登り候由風聞之處六半時比に至

此一書極て穩當と云へ



御所邊に當り大炮之音夥敷相聞但是迄は空發之由にて小砲も間た々に  
 は相聞候右は入江九一列歎願趣は追て御沙汰に可相成候間人數少々相  
 殘跡は都て引取候様若引取不申候節は追拂可被仰付由於伏見御目付衆  
 より福原へ御應對有之候由之處同人十八日暮比より道押にて京之様に  
 登り候を大垣勢より仕懸候得共引色に相成候に付追討に懸り候跡伏見  
 本陣を彦根勢より焼拂候由此一段少し疑惑有之伏見の人より之紙面右街道に  
 福原手負引取節自ら焼立候と有之候由て御堅場三ヶ所も打破稻荷前迄押來候處引返し此處戰にて死人も有之引取  
 候とも唱候又引取候譯不知  
 申候行方不相分伏見より船にて下り候共申候右 御所へ押懸候人數御  
 所へ寄候人數は一向不相分百人餘りも爲有之哉逆は多く入列脱走亡命之徒と相見  
 も二百とは有之間敷何方も空鉢之見込に候事頻に打立候由最初中立賣御門  
 取合之前後御堅手より前文大炮空砲眞玉相  
 交候よし頻に打立候由後段鷹司様裏門を破  
 入込候て越前と打合御同家は御立退跡にて長易人は家中入込二階杯よ  
 り鐵炮を頻に打懸候付會津手より眞玉之大炮を打懸候處右之内出火と

相成候比は五過にても可有之哉其後死亡之外手負重き者は同士より打  
 捨又生捕られ候も有之退散いたし候由

一右之人數は天龍寺屯之勢と相聞候處右之内にも不同意之者多有之候を  
 誘立馳來候處

御所近く相成過半は天龍寺へ引取候由又山崎屯之内も出懸候得共中途  
 より引返候とも唱候

一死骸二三拾餘も可有之多く首は無之分取いたし候と相見候又火に燒候  
 死骸も有之鷹司様内には整馬も二疋被燒候死骸も有之鷹司様には馬も  
 二疋被燒殺長藩入江九一と合印記候も有之菊池御家人にて去秋亡命之  
 高木元右衛門も死骸有之其外土易人杯も有之候由御堅之内も手負死人  
 も有之たると相聞只今しらへに相成居候

一一書には越前堺町にて鐵炮にて五六人鷹司殿御屋敷内銃劔にて二十五  
 人右御屋敷外にて十人餘裏御門より逃去九人計討薩只中立賣にて二十



三討取其外打捨も有之候得共數は相分不申召捕十四人國司信濃具足箱一分取桂幸五郎と姓名印有之

松山固三條にて召捕六人馬一疋

堺町にて桑名勢より七八人討取味方三人討死

蛤御門にて大炮一發に三人討取

會津境町にて召捕七人打捨四十人計初より首取候ては働之障相成候間

取不申都合之所相分不申候此書付は死人餘り多し味方之死骸は直に引取長人分は其儘にいたし有之現に見る所は四十餘り外無之候

一寺町御門には寄來不申流矢は追々飛來候由尤外様組柴尾文左衛門外手

御堅之内より打出候玉疵を受候由療治出來しに候

一御役所初晝夜詰切に付焚出御酒被下候且寺町へ之焚出并諸品運送等人

足一向御手に入兼大に混雜いたし候

一天龍寺山崎之様に十九日夕より薩勢押寄八幡には藤堂會津彦根松山之

勢廿日より押寄候由之處何方も兵糧武具諸道等も打捨置退散致候由天

龍寺本堂には地雷火仕懸有之候に付薩人火を付候處發場いたし一字燒

亡之由此處之勢は丹波之様に逃去候とも唱候

一右亂後鳴も靜り不申内加賀若殿筑前守様には如何之事に候哉御人數二

千人計被殘置御歸國に相成候尤 御暇は出候由

一前條鷹司家より之火之手丸太町通真横に廣かり東は寺町革堂下より兩

側に懸西は堀川右之外島丸通より西三四町迄一面に燒亡十九日夜半迄に南中立賣町迄北手に燒登り候

は四條邊迄燒通り右擾亂中殊更大火之事故洛中外之老若男女風呂敷包

杯を携或は諸道具を運はせ四方に立退賀茂川原或は田畑に才蹴上を通

り候者共多くは山科大津之様に立越夥敷混雜にて有之又火を遁れ候ヶ

所も同様にて男一人位居殘店を閉商賣も一切取止候但風は無之候 廿

日曉天洛中猶四條邊より燒通り東は寺町又は高瀬川賀茂川を限り西は

堀川限にて暮比七條八條之野邊迄燒拔西本願寺は堀川前燒通り東は又

々燒亡之由一體土藏も段々内に火移り燒候得共殘候分は多有之候に付



野原之様に一見通しには相成不申候凡洛中八步通にも至り可申哉天明  
之火よりも大火之見込候今日種々之流言さへ有之洛外に懸諸人道具を  
運はせ四方に立退候混雜還て昨日よりも甚敷大津を差罷越候者多有之  
候處同所も自然長刃人仕懸候得は膳所より焼拂に相成候との事にて京  
都を差行違々々廿一日迄も混雜いたし候右道具運之日雇賃遠近に寄一  
人に付壹歩より壹兩迄も取候由廿日風は八比北風少々立候得共無程止  
申候

一右大變中之出火故火消は一切懸り不申自儘に焼廻り候

大火にて之死亡は何之唱も無之候

米を初諸色一向に買方出来兼諸人大に及難澁候依之南禪寺御園米之内

拜領被 仰付候

洛中は御救米之達而已有之候由以上

山崎表之長人皆兵庫へ立除候由

七月廿日之夜六半時過彦根之人數凡四五百人計伏見押出八幡橋本へ同  
日夜半着翌廿一日朝五時橋本より川越に山崎室寺并天王山陣所へ火矢  
打懸候處火之手上り候由但引拂後なり

一十八日夜福原越後稻荷街道す十川にて手負引返伏見屋敷へ引取十九日  
朝五時過屋敷前より舟にて大坂へ引取候由

右三ヶ條は伏見出役津野田儀左衛門注進之趣とて書添置 七月日書一

一昨九日薩人早打にて御城下通行之節面談人へ逢候處右薩人嘶之由に  
今度十八日戰爭に長藩脱走之面々は夜五時分は早入京いたし居候入浴  
之節は葵紋薩紋會紋之灯燈所持いたし入込候に付所々口々も何之差障  
り無之罷通候由且薩藩より分取之内長藩陳所へ殘居候煽煽蠟燭等皆夷  
國之品にて有之名を薩州と偽り潜に交易いたし居候との嘶之由愚案に  
入京一條は面白き謀計夷國交易一條は薩より之仕事にて自交易所持之



品を入繰いたし置己れか悪名を長州へ投懸候との姦黠と相考申候云々

八月十一日 (元治元年)

臼杵 太郎

様

右一紙

有栖川中務卿宮 同 帥宮 大炊御門右大將 正親町大納言 中山前  
大納言 橋本中納言 石山少將 平松甲斐權介 石山右兵衛權佐 勅  
修寺辨 五辻大夫

右者十九日一舉に付御不審之儀被爲在候間御調中被止參 朝候事

但他行并他面會無用之事

鷹司前關白 同大納言

右者十九日一舉に付御不審之儀被爲在候間御調中被止參 朝候事

但他行并他面會無用之事

中山前中將

縱令雖有非常之儀 御沙汰被爲在候迄は不可參 朝候事 右之通議奏

衆より被 仰付候事

七月廿八日 (元治元年)

右一紙

七月十八日午時過一橋殿より御内沙汰にて被仰渡候書付

伏見一ノ先戸田采女正 二ノ先井伊掃部頭人數計但掃部頭は

禁闕を守るへし且桃山は井伊家より只今より取布へし

二ノ見松平肥後守人數 同所同代人數但職柄に付方面之諸軍を令し進

退を主るへし

監軍蒔田相模守監察壹人但二ノ見に在て諸軍に令を傳へし



遊兵 有馬遠江守 小笠原大膳大夫但伏見打破候後戸田有馬小笠原之  
三手地形を見て嚴に備ふへし其餘は山崎之寄兵たるへし  
八幡守兵 松平伯耆守但事不發前は八幡を取布へし只今より取布手當  
肝要也

山崎先手 松平甲斐守 二ノ見藤堂和泉守榎木原へ押出へし 酒井若  
狭守但天龍寺山崎寺御旗本御總括御二陣守護職人數奇兵細川越中守有  
馬中務大輔

天龍寺一ノ先松平修理大夫 二ノ先本田主膳正

妙心寺二ノ見松前越中守但旗頭となりて右軍を總へし

左之先大久保加賀守二ノ見松平隱岐守但旗頭となりて左軍を總へし遊  
兵青山因幡守松平筑前守但三條邊より山内造へ押出機に應し應援すへ  
し

豊後橋 間部下總守 市橋下總守

洞ヶ峠 小出伊勢守

老ヶ坂 松平相模守

下賀茂 仙石讃岐守

鷹ヶ峯 松平備前守

上賀茂邊川手前尾州

長州對州屋敷押加賀

因州屋敷押黒田紙右一

一帥宮正議之御方々數拾人御召連にて御參 内之上時勢切迫被 仰出

皇國之御爲強て御諫争被爲在候事

一右御參 内相成候は、相圖に長州より哀訴第一鷹司様烏丸様并幽居之  
御方々様へ差上申候事但同时に正義之御方々様并列藩へも右之書通達  
右御幽居之御方々様御覽被遊候て  
皇國之御浮沈此一舉にて斷然御推參にて 帥宮様へ逐一被仰候事此處



にて 宮始て御聞に達し直様四門守衛之儀加因備へ被 仰付候事三藩  
人數相集候處 有宮様へ兼て差出置因州人數四門内御守衛被 仰付候  
事九門は諸藩へ嚴重に守衛被 仰付候事右に引續尹宮様御參 内御差  
止逐會之

勅命被下候事

一長州より 天幕へ討會之儀は鷹司様御參 内を相圖に差出候事引續會  
賊へ戦書を送る事

右之次第に候委細は直に石川同人より御聞取可被下候七月右事情福原  
越後より國司信濃へ上封完名有之下嵯峨之木屋福田治兵衛と申有福之  
町人兼て長州家出入にて何廉世話いたし新番格迄も被仰付居候て此節  
之儀も別て致世話候處右町人は逃去跡居宅へ此書面相殘居候由にて差  
出候を一見いたし寫取置候尤武器類并長州目印提灯等多分有之たる由  
右一紙

是より以下長藩之内致所持居候分書取申付候條々

一今度其方事上京申付諸隊之者預置候諸事以下不分明

一伍中之者は令を伍長に受伍長は令を隊長に受隊長は惣督之指揮を受諸

隊一和爲肝要事

一私闘は不及申輕舉妄動大事を謀る義は尤嚴禁之事

一惣て非禮非義之振舞有間敷事

一國家之動靜猥に他へ洩間敷事

一奸淫大酒等堅禁止之事

一僭上虚飾之衣服は勿論無用たるへく候惣て諸士匹夫之分限不可亂事

右之條々違背之者於有之者軍律を以相糺品に寄切腹可申付者也

元治元年子六月

親慶



國司信濃とのへ

廣定

國賊松平肥後守殿爲討取今夜子刻進發御花島宿所へ押入申候付信濃殿には中立賣通兒小民部は下立賣通森兎太郎は出水通り行軍九門内へ入込候戰略可爲肝要候乍然敵は肥後守耳之事に付列藩之内可成は不及取合様可致守殿旨趣申談候上無理差押候へは無餘儀戰可被申候第一御所内之事に候得は賊を討洩し候ては不相濟候得共大炮小銃之打方其外心を用ひ候様可仕候

右之通相心得兼て申聞置所之軍法相守勝利を得候様可被心懸事

子七月十八日 (元治元年)

荻野隊二隊 九拾二人 司田左衛門 桑原謙藏  
毛利謙八 熊村音四郎

小隊一隊 四拾人 平田邦彦

誠意隊二隊 六拾二人 中原太三郎 野村十兵衛

力士隊 九人 新坂小太郎 病院

三百廿九人

十二搦三丁 三貫目一丁 二百目二丁 百目二丁

八丁

陽川庄藏 桂讓助 高橋熊太郎

浮田八郎 賀屋主税 久保無二三

右郁太郎

右斥候

立花在介 櫻井薫 高木元右衛門

村田一藏 宮部鼎藏 内田孫三郎

國友常吉 酒井莊之助 西島龜太郎



加屋四郎 今枝紫右 岩見七郎  
 宮池彌右衛門 大澤圓平 松村光雄  
 關東太郎 大久保熊藏 石澤左馬之助  
 小坂小次郎 入江八千兵衛 萱野嘉右衛門  
 中津彦太郎 黑瀬一郎助 村松信一郎  
 橋五郎 塚本新助 二見一鷗  
 右二十七人

右之通 數器械方兼て如是爲寄合被差置合戰之一舉在之候節急速に差  
 出山科大津叡山坂本邊へ敵動候節相戰候様被 仰付候事但諸藩之部小  
 隊之内司令士北村圓吾 喜多村武七 銃卒三拾人 大砲一丁 十二  
 封打手七人 人足八人  
 荻野隊之内司令士毛利謙八 桂雅兼 兵士四拾人大砲三丁 人足四人  
 狙撃隊之内司令士山縣三左衛門 吉田半輔 銃卒三十人 大砲一丁

人足八人

金剛隊之内司令士森重謙藏 花田朝熊 其士二十人 大砲一丁 打手

四人 人足八人

力士隊之内司令士那須唯一 新坂小太郎 末島才助 兵卒三十人 大砲

一丁 木砲三丁 人足十二人

中軍小隊之内司令士國弘忠吾 厚母源四郎 山中彌次郎 兵卒十人

大砲一丁 人足八人 森龜太郎 同勢五人 福原兎太郎

二百九拾三人内六拾八人人足

劍銃六十丁 火繩筒七拾丁 野戰砲八丁

長州篠原手録寫

クルメ 權藤真卿 水田謙二 池尻嶽五郎  
 尾脇 藤田行藏 肥島原 伊藤益荒 榎村真一郎  
 小田原 石川於菟三郎 織田熊太郎 川俣茂七郎  
 出羽松山



紀州	岩橋半三郎	土州	石川誠之助	水口	豐田美稻
長州	兒玉孫十郎	島原	榎林富軒	越後村松	泉助
	佐々幸藏	因州	中野治平	長州	佐々木松也
	伊吹一太郎		乃美織江	同	木原又兵衛
	遊佐小六		桂條介		湯川正藏
	福原越後		森重謙二		久保無二三
	來島龜之進		佐久間佐兵衛		
室寺山義兵					
大元帥	眞木和泉	因州	足立八藏		國司信濃
	肥後				
	宮部鼎藏		酒井庄之助	肥後	高木元右衛
	丹波		小坂小次郎		中澤彦太郎
	今枝泰藏		兒玉小民部		内田彌三郎
副將	久坂元瑞		加屋四郎		西島龜太郎
	國友常吉				

右一書

萱野嘉右衛門	黑瀬一郎助	土州	能勢逢太郎
字都宮	姫路		但馬
廣田精一	野村貢		宮池孫右衛門
入江八千兵衛	監内藤		

二 水戸中納言慶篤卿直言上表之事

前文し歟四行禁諱之事故得寫不申候 方今諱なるへし  
 謹ふ奉奏上候長藩士等宰相義 勅勘之身に在之候處爲其臣不奉恐 朝  
 廷入京之中騒動所々同上燒は會の所爲の由延燒其罪不輕は勿論と奉存候依之京江戸伏見大坂  
 等之長州屋敷悉燒拂或は墜棄に相成候段其罪科之當否は姑措之前代未  
 聞之儀に奉存候然共是等違論可奉申上様無之候然に長州を是とし官議  
 を非とする巷談野説之無知之輩を召捕に相成候由是必非



聖斷左右掩

同上於京都に中川宮井會津を誹謗いたすまじきとの趣町  
觸に相成於大坂も長州を譽候もの段々被召捕候由に候事

聖明之所致と奉愚察候へ共是政道第一之大離關不奏上は不可在奉存候  
天下之口を塞ふ國家之及危難候は古今皆未出于此者無之候恐多も  
承久上皇

元弘上皇も皆此に被爲出候と奉存候古 聖王之辭には之を芻蕘に問と  
承及候天下之利病能爲知に御座候天に無口以人令言巷談野説といへと  
も能々被爲在納容候て 廟堂之定議被爲備度奉存候匹夫匹婦之如く己  
を是とし彼を非とする者を被爲咎抔は淺間敷御事にて乍恐

天子者穆々之聖容には無之歟と奉存候宰相罪科之儀は未伺知候へとも  
最初攘夷之

勅諭確守し天下萬民之爲獨立勤 王其意無可賞共難申歟と奉存候時に  
阿り勢に附く佞人之類に無之候藩士等入京以前度々難願之處經其筋而  
可奉願旨御説是泰平無爲之御事方今之時節如此にては微臣等之衷情奉

達

天朝聖聰候事不能迂遠疎濶にては奸臣途に横候儀も有之候且於不立去  
者可加誅伐旨に付彼等も武士之義氣憤激之餘押て入京之處より動亂を  
生し候事全無據所致と被察候藩士之所爲は宰相之罪勿論に候へ共宰相  
父子動靜又微志をも無御糺明朝敵を名とし速に征伐候ては公論とは難  
申歟と奉存候是巷談野説之者を召捕と同轍に御座候人之己を非とする  
を答るは自らも心に慊さる所あらむと有司を御譴責被遊候は、所逃其  
罪無之歟と奉存候能々巷談野説も御採用被爲在度候今之時節は一人に  
ても義氣之士可執用に御座候況大藩をや乍恐民之所好奸民之所惡にて  
至當之公論寛大之徳容を以  
聖斷被爲在候様御執奏奉願上候若長州を遊説するを以於蒙罪は臣敢  
不辭死候誠恐誠惶謹言

元治元甲子年八月朔日



原書端に云く元治元甲子年八月朔日近衛殿下へ水戸侯より上書云々

三 肥前老主齊正朝臣上京已前藩中告諭書之事

此節長藩之暴動朝敵之姿は有之候へ共誅伐之共儀に至候ては決る不可然外患之央内亂を生し候而は彼術中に陥可申のみならず皇國四分五裂に罷成候へは

公武一和攘夷大義に難至就るは此節長誅伐之儀は相止候様公卿間に周旋不相叶は拜

天顔乍恐御諫言被申上御國是一定此節上京被遊候事

八月 日 (元治元年)

四 山陽道國々之形勢伊勢屋彦藏物語之事

甲子七月十七日浪華發足いたし其夜攝州灘と申所に止宿仕候右浪華發程之前日は長州人乗込之船共八艘程入港致候由彼土にて風説承申候翌十八日播州明石に泊り此地は至て靜謐にて何之異狀も無之候翌十九日加古に泊り翌廿日同所發程致鶴龜之茶店に休足致居候内京都變動之事初承申候就ては諸藩之早打等三十計りも通行いたし候を見受申候併其節迄は未だ何事と申儀は相分り不申唯京都大火且諸方打合も有之たる杯風評仕候其日有年之驛へ罷越申候處長州之馬と申事にて都合十匹計も京地之方へ牽上り罷越見受申候尤右馬には皆々竹木類數多うせ有之當地之評論には何れ陣場之用にも相立可申歟との巷説にて御座候其日は片上迄罷越申候處三石近邊より片上迄之間にても乗馬數都合七八十匹見受申候是以前條通に御座候右馬は如何之譯にて御座候哉其夜皆



片上迄引返止宿仕候翌廿一日片上發足岡山との間途中にて長州引返之御人數に逢申候尤右御人數は此節世子御上京御供之御人數之由京都變動相聞引返候ものと推察仕候世子は御船中と申事にて御座候且又此節評判にては世子も此節岡山御城へ御立寄被成候様之取沙汰も有之候得共跡達て委細承り申候得は世子には御立寄無之御船にて御下に相成御名代として御家老一人被差越岡山御城へ參候様子にて御座候其日備前御家老と相見池田加賀と申人に行逢申候多人數にて此節上京と申事に御座候其後岡山に着致候後委細承申候得は右加賀と申仁も姫路より上方筋通行出來兼候趣にて引返に相成候由御座候其夜は岡山御城下京橋之東詰に止宿仕候翌廿一日岡山出立致備中福渡と申候處へ泊り申候翌廿三日作州津山罷越中一日滯留仕候當地抔は格別相替候事も見受不申候從當所北中國經罷下り可申心組にて諸方道筋相聞繕申候處因州あたりは此節旅人通行としては六ヶ敷由にて往來は出來間敷とも承候に付同

廿五日同所より引返備前之内高田と申所へ參候處近日旅人改方殊之外嚴重にて領内は一夜之止宿も難相成尤通過備中之様に相越候は、通行は不苦段役々より申聞候間備中足守へ罷越可申段返答致置其夜は高田之先き茶小屋有之處へ内々止宿仕候此處にて承候得は岡山御城下之内京橋小橋之間に中島と申町有之候を皆々燒拂急に御臺場御築立に相成候由に御座候就ては家中市中抔も一紗騒立候由承申候尤兩三日跡通行致候備中福渡之向方備前御領内には番所新規に出來いたし候を見受申候翌廿六日同所發足いたし足守之御城下に着仕候右御城下にて承候得は當主木下肥後守様と申御方先月來御出京に相成居其後江戸へ御出之處御途中東海道にて何方御出被成候哉御行衛一向に相知不申候由御家中は不及申市中抔も一紗騒動最早三十日餘に相成候得共于今何たる御左右も相分不申御供之人數とても一人も歸り不申如何之譯に御座候哉事柄一切相分不申候其夜は備中矢掛驛に泊申候翌廿七日神邊驛へ罷越



申候處當所には福山より御固め之人數參居申候尤當所之人數も今日より出張申候由に御座候其夜横尾と申所に泊り申候翌廿八日福山御城下入口へ罷越申候處所々御番所等出來致居旅人入込之儀は一切御指留にて引返海道筋懸り尾ノ道へ罷越申候處尾之道之手前伊勢山と申所へは福山より御人數二百計出張致具足槍長刀にて相固め居申候を見受申候其夜尾の道に着仕候處當驛は至て穩にて御座候夫より内海船に乗船致翌廿九日藝州内海に着船當表杯も至て靜謐にて格別相替候事も見受不申候翌晦日廣島御城下へ着仕候處旅宿にて承り候得は昨に海田と申候驛東口に御臺場一日に御築立に相成申候由噂仕候且又廣島御城下内橋場には此節新規に御番所出來致居御警固之御人數二十人宛も詰居候を見受申候右廣島に一日滯留致當月二日之夜廣島より出船致翌三日周防新港と申候處に着船仕候に付直様岩國へ罷越可申心組にて出懸申候處途中番所有之一切通行出來兼不得已濱邊傳にて藝州御領之内大竹と申

所迄跡戻致直様小瀬川之様罷越申候右小瀬川にも御番所有之候得共無異儀罷通申候其外關戸小瀬川之間にも小き山有之候處には此節新に關所築立當時作事最中にて御座候其日は關戸之先より岩國へ往來之道筋有之候に付夫より入込岩國之御城下迄罷越申候處當表は指而相替候儀も無之先靜謐と見受申候夫より引返し玖珂へ止宿仕候翌四日同所發足致し周防徳山罷越申候處右途中にて承候得は異船十八艘豊後沖姫島と申所に碇泊致居候由承申候翌五日釜邊と申處に泊申候右途中にて夕七比より炮聲夥敷相聞候に付往來之人々に相尋候處此節下關表にて異船取合相始りたる由噂仕候翌六日之朝未明より不相替炮聲相聞其内朝五時過より二切と申合圖之鐘音所々に相響き螺聲も方々へ吹立引續き多人數所々へ散亂いたし自身持場々々へ驅付候ものと相見皆々劔付筒を携帯し鐵炮袖に後鉢巻杯致居一人も甲冑は帶不申候其日小郡迄罷越申候處右途中にても右同様形装にて人數餘計に行逢申候夕剋小郡に着仕